

# 天祥地瑞神系表説明書

謹言 謹んで白す<sup>まう</sup>、霊界物語第一巻より第七十二巻迄は、天之御中主大神より説きおこして神素盞鳴大神の神業を述べられてありますが、天祥地瑞は天之御中主大神以前の天之世（幽の幽の世界）における霊界の大宇宙創造の神業を述べられたもので実に前代未聞の神典であります。

約言すれば、現瑞二神の幽の幽からの活動を示されたものであります。

昭和二十七年三月十日 木庭次守

（追記）本書は茨城主会第八回神書研修会（昭和二十九年自一月十三日至一月十五日）にあたり使用のためにプリント<sup>1</sup>したるものなり。

天祥地瑞神系表説明書 .....	1
一 総説 .....	2
二 天之峯火夫の神 .....	6
三 高天原.....	7
四 天之高火男の神.....	8
五 ◎の神声 .....	9
六 言幸比古の神 .....	11
七 太祓 .....	12
八 国生み神生みの段 .....	15
九 香具の木の実.....	17
十 紫微の宮司.....	19
十一 水火の活動.....	19
十二 国生みの旅.....	21

---

<sup>1</sup> 元原稿は木庭次守による手作業のガリ刷りである。本資料は『天祥地瑞』昭和八～九年初版の抜粋からなるが、このデジタル版では、木庭次守が編纂に関わった昭和四十五年発行の三版を使用している。なお、木庭次守の視点をより正確に伝えるために、書式を変更し、一部、木庭元晴によって追加している。一応のデジタル版が完成し公開した日は本日、Jun. 5, 2021である。なお、天祥地瑞神系表はこの説明書の公開に合わせて、表現の正確性を高めるために、修正版を作成し公開する予定である。

(1) 高日の宮（高照山） .....	24
(2) 玉泉郷（東雲の国） .....	25
(3) 玉手の宮（三笠山） .....	25
(4) 玉野宮居（玉藻山） .....	26
(4 a) 真鶴新国 .....	26
(4b) 玉藻霊山 .....	28
(5) 万里ヶ丘（万里の島） .....	29
(5 a) 西方の旅 .....	29
(5 b) 高千秀の宮司 .....	30
(5 c) 朝香比女の神 .....	31
(5 d) 万里の神国 .....	34
(6) 常磐ヶ丘の宮（葦原新国） .....	37
(6 a) 葦原の国 .....	37
(6 b) 建国祭の祭典 .....	40
(7) 土阿の宮（葭原の国） .....	41
(7 a) 怪体の島 .....	41
(7 b) 葭原の国土 .....	43
(7 c) 天の鳥舟 .....	45
十三 伊佐子の島 .....	48

## 一 総説<sup>2</sup>

三千大千世界の大宇宙を創造し給ひし大国常立の大神は、ウ<sup>3</sup>声の言霊の御水火より天之道立の神を生みたまひ、宇宙の世界を教へ導き給ひたるが、数百億年の後に至りて、稚姫君命の霊性の御霊代として尊き神人と顕現し、三千世界の修理固成を言依さし給ひ、またア<sup>な</sup>の言霊より生り出でし太元顕津男の神の御霊も神人と現れ、共に

<sup>2</sup> 天祥地瑞三版 子の巻 総説全文にあたる。

<sup>3</sup> 王仁三郎は、「片仮名のア行とヤ行とは間違ひやすいが、ア行は、ア、イ、ウ、エ、オの如く皆画が離れて居り、ヤ行はイ、エ、と言ふ風にくつついて居るので、チャンと区別があるのである。今は何もかも滅茶苦茶になつて居るが、今度の物語（天祥地瑞）から此活字を鑄造して改めることにした」（玉鏡p.149）と書いている。このデジタル化でも特殊文字を使わないので、赤字で表示する。ア行とヤ行の字画の違いを木庭次守は舌と歯の関係に帰していたことを思い出す。

神業<sup>みわぎ</sup>を励み給ひける。天の時ここに<sup>4</sup>到りて葺の御霊稚姫君命は再び天津御国に帰り給ひ、葺の御霊の神業<sup>みわぎ</sup>一切を瑞の御霊に受け継がせ給ひける。ここに葺の御霊、瑞の御霊の活動<sup>はたらき</sup>を合して伊都能売の御霊と現れ、万劫末代の教を固むる神業に奉仕せしめ給ひたるなり。

葺の御霊は荒魂<sup>あらみたま</sup>の勇と和魂<sup>にぎみたま</sup>の親を主とし、奇魂<sup>くしみたま</sup>の智と幸魂<sup>さちみたま</sup>の愛は従となりて活<sup>はたら</sup>き給ひ、瑞の御霊は奇魂の智と幸魂の愛主となり、荒魂の勇と和魂の親は従となりて世に現れ、今や破れむとする天地を修理固成すべく現れ出でたるなり。しかして葺の御霊は経の神業なれば言行ともに一々万々確固不易なるに反し、瑞の御霊の神業は操縦<sup>そうじゅう</sup>与奪<sup>よだつ</sup>其権有<sup>そのけん</sup>我の力徳<sup>われにあり</sup>をもって神業に奉仕し給ふ神定めなり。神諭にも、経の御用はビクとも動かれず鵝の毛の露程も変らぬが、瑞の御霊は緯の御用なれば機の緯糸のごとく、右に左に千変万化の活動あることを示されたり。しかるに今や伊都能売の御霊と顕現したれば経緯両方面を合して神代の顕現に従事し給ふこととなりたれば、ますますその行動の変幻出没自由自在なるは到底凡夫の窺知し得べきものにあらず。かくして大宇宙の神界治まり、三千世界の更生<sup>こうせい</sup>となりて、全地上の更生の神業は成就すべきなり。この消息を知らずして大神業に奉仕せむとするものは、あたかも木に抛つて魚を求むる如く、海底に野菜を探り、田園に蛤を漁るが如し。

神は至大無外至小無内 在所如無 不在所如無 ていのものなれば、従来の各種の宗教や賢哲の道德率を標準としては、伊都能売神の御神業<sup>みみわぎ</sup>は知り得べき限りにあらず。たとへば機<sup>はた</sup>を織るにしても経糸はビクとも処を変ぜず緊張し切りて棚にかかり、緯糸は管に巻かれ杼<sup>ひ</sup>に吞まれて小さき穴より一筋の糸を吐き出し、右に左に経糸の間を潜り立派なる綾の機<sup>おりあく</sup>を織上ぐる如きものなり。機を織る緯糸は一度通ずれば二度三度<sup>をさ</sup>箴にて厳しく打たれつつ、ここに初めて機の経綸<sup>しくみ</sup>は出来上るものなり。

綾機<sup>あやはた</sup>の緯糸こそは苦しけれ

一つ通せば<sup>みたび</sup>三度打たれつ

神界の深遠微妙なる経綸については千変万化極まりなく、善悪相混じ美醜互に交り

---

<sup>4</sup> 三版では、「茲に」となっているが、この文に続く「ここに」は平仮名になっており、統一を取るため、平仮名とした。このような副詞やさらに接続詞などの類は随時、平仮名としている。

て完全なる天地は造られつつあるなり。伊都能売神の神霊も亦その如く三十三相は言ふも更なり、幾百千相にも限りなく臨機応変して神業に依さし給へば、凡人小智の窺知すべき限りにあらずるを知るべし。

かつ蔽の御霊の教は神人一般に対し、仁義道德を教へ夫婦の制度を固め、仮にも犯すべからざるの神律なり。ゆえに瑞の御霊の大神は紫微天界の初めより太元顕津男の神と現れまして、国生み神生みの神業に奉仕し給ひ、万代不動の経綸を行ひ給ひつつ若返り若返りつつ末世に至るまでも活動給ふなり。その間幾回となく肉体をもって宇宙の天界に出没し、無始無終にその経綸を続かせ給へば、他の神々は決してその行為に習ふべからざるを主の神より厳定されつつ今日に至れるなり。

神諭に経の御用は少しも動かされず変へられないが、緯の御用は人間の知恵や学問にては悟り得べきものにあざれば、神に仕ふる信徒<sup>まめひと</sup>達はその心にて奉仕せざれば神界経綸の邪魔となると示されてあるのは、この間の消息<sup>かん</sup>を伝えられたるものなり。

ゆえに本書は有徳<sup>うとく</sup>の信者<sup>しんじや</sup>又は上根<sup>じやうこん</sup>の身魂にして神理を解し得るていの身魂にあざれば授与せざるものとす。この物語を読み神理を覚悟する人士は従来<sup>しんたい</sup>の心の持方を一掃し、三千世界更生の為に其の力を添へられむ事を希望して止まざるなり。賢哲のいはゆる中庸、中和、大中、その中は神府<sup>ちゆう</sup>の中とはおおいに異れり。ゆえに現代人の見て善と為す事も、神の眼より視て悪なる事あり、また現代人の目より悪と視ることも神界にては善と為すことあり。これを善悪不二の真諦<sup>しんたい</sup>といふ、嗚呼惟神霊幸倍坐世。

いよいよ本巻よりは、我古事記に現れたる天之御中主神以前の天界の有様を略述し、もって皇神国の尊嚴無比なるを知らしめむとするものなり。

本書は富士文庫に明記されたる天の世<sup>あま</sup>を初めとし、天之御中之世<sup>あめのみなかのよ</sup>、地神五代の世<sup>ちしんごだい</sup>より今日に至る万世一系の国体と、皇室の神より出でまして尊嚴無比なる理由<sup>せんめい</sup>を闡明せむとするものにして、まづ天の世より言霊学の応用により著はせるものなれば、決して根拠なき架空の説にあらずるを知るべし。富士文庫神皇記<sup>しんのうき</sup>の天の世の神の御名を列記すれば、

- 一 天之峯火夫神<sup>あまの</sup>
- 二 天之高火男神<sup>あめのたかひを</sup>
- 三 天之高地火神<sup>たかちほ</sup>

四 天之高木比古神

五 天之草男神

六 天之高原男神

七 天之御柱比古神

以上七柱の天神七代を天の世と称し、天之御中主神より以下七代を天之御中之世と称へ奉るなり。ここに皇国固有の言霊学の力をかりて、大虚空<sup>だいこくう</sup>における最初の神々の御活動を謹写せむとして著はしたる物語なり。また神生み国生みの物語も、最初の神々は幽の幽に坐しませば、現代人のごとく肉体を保ち給はず全く気体に坐しませんがゆえに、現代人のごとく男女の関係は無く、ただ言霊<sup>ことたま</sup>の水<sup>い</sup>火<sup>き</sup>と水火を結び合せて国を生み神を生み給ひしを知るべし。最初の神々はいずれも幽体<sup>いんしん</sup>隠神に坐すがゆえに、男神は比古<sup>をがみ</sup>を附し、女神は比女<sup>か</sup>の字を藉り顕しあれば、後世における彦神姫神とはおほいに異なれるを知るべきなり。

太元顕津男の神の神名<sup>しんめい</sup>は、ア声の言霊南西に生き給ひて顕れ給ふ神名にして、国を生み神を生まし給ふといへども、国を開拓し玉ふ神業を国生みと言ひ、国魂の神を選ませまたは生せ給ふを神生みと称へ奉るは、皇典古事記の御本文に徴するも明白なり。また八十比女神の国生み神生みの神業も、ただ単に言霊の水<sup>な</sup>火の組合せによりて、言霊神の生り出で給ふ根本の御神業なるを知るべし。

惟神神代の生り出でし有様を  
神の力によりて説くなり

言霊の天照国の人々は  
心を清く持つべきを知れ

言霊の助くる天津神<sup>あまつかみくに</sup>国に  
生れ<sup>あ</sup>ます神は<sup>ことば</sup>詞の花なり<sup>5</sup>

---

<sup>5</sup> この第三歌は原稿では脱落している。とくに省略する必要性を感じないので追加した。

## 二 天之峯火夫の神<sup>6</sup>

天もなく地もなく宇宙もなく、大虚空中に一点の、こつぜんと顕れ給ふ。この、たるや、すみきり澄みきらひつつ、次第々々に拡大して、一種の円形をなし、円形よりは湯気よりも煙よりも霧よりも微細なる神明の気放射して、円形の圏を描き、を包み、初めて<sup>ス</sup>◎の言霊生れ出でたり。この◎の言霊こそ宇宙万有の大根元にして、主の大神の根元太極元となり、皇神国の大本となり給ふ。我日の本はこの◎の凝結したる万古不易に伝はりし神霊の妙機として、言霊の助くる国、言霊の天照る国、言霊の生くる国、言霊の幸はふ国と称するも、この◎の言霊に基くものと知るべし。

キリストの聖書にヨハネ伝なるものあり。ヨとはあらゆる宇宙の大千世界の意なり、ハは無限に発達開展、拡張の意なり、ネは声音の意にして宇宙大根本の意なり。ヨハネ伝首章に曰く、『太初に道あり、道は神とともにあり、道はすなはち神なり。この道は太初に神とともに在き。万物これに由て造らる、造られたる者に一としてこれに由らで造られしは無』と明示しあるも、宇宙の大根元を創造したる主の神の神徳を称へたる言葉なり。

清朗無比にして、澄切り澄きらひスースースースーと四方八方に限りなく、極みなく伸び拡がり膨れ上り、ついに◎は極度に達してウの言霊を発生せり。ウは万有の体を生み出す根元にして、ウの活動極まりてまた上へ上へと昇りアの言霊を生めり。またウは降つてはついにオの言霊を生む。

◎の活動を称して主の大神と称し、また天之峯火夫の神、またの御名を大国常立神言と奉称す。大虚空中に、葦芽のごとく一点の、発生し、次第々々に膨れ上り、鳴り鳴りて遂に神明の形を現じたまふ。◎神の神霊は◎の活動力によりて、上下左右に拡がり、◎極まりてウの活用を現じたり。ウの活用より生れませる神名を宇迦須美の神と言ふ、宇迦須美は上にのぼり下に下り、神霊の活用を両分して物質の大元素を発生し給ひ、上にのぼりては霊魂の完成に資し給ふ。今日の天地の発生したるも、宇迦須美の神の功なり。ウーウーウーと鳴り鳴りて鳴極まる処に神霊の元子生れ物質の原質生まる。ゆえに天之峯火夫の神と宇迦須美の神の妙の動きによりて、天津日鉾の

<sup>6</sup> 天祥地瑞三版 子の巻 第一章全文にあたる。

神大虚空中<sup>こくう</sup>に出現し給ひ、言霊の原動力となり七十五声の神を生まれ給ひ、至大天球<sup>しだいてんきう</sup>を創造し給ひたるこそ、げに畏<sup>かしこ</sup>き極みなりし。再拜。

大虚中<sup>だいきよちう</sup>ただ一点の、現れて  
至大天界<sup>しだいてんかい</sup>生まれ給へり

### 三 高天原<sup>7</sup>

ここに宇迦須美の神は○の神の神言<sup>みこと</sup>もちて、大虚空中に活動し給ひ、ついに<sup>ア</sup>の言霊を神格化して大津瑞穂<sup>おおつみづほ</sup>の神を生み給ひ、高く昇りて天津瑞穂の神を生まれ給ひぬ。大津瑞穂の神は、天津瑞穂の神に御逢<sup>みあ</sup>ひて夕の言霊、高銚の神、力の言霊、神銚の神を生まれ給ひぬ。高銚の神は大虚中<sup>だいきよちう</sup>に活動を始め給ひ、東に西に南に北に、乾坤巽艮<sup>けんこんそんごん</sup>上下の区別なくターターター、タラリタラリ、トータラリ、タラリヤリリ、トータラリとかけ廻<sup>めぐ</sup>り、神銚の神は、比古神と共にカーカーカーカーと言霊の光かがやき給ひ、ここにいよいよタカの言霊の活動始まり、高銚の神は左旋運動を開始し、神銚の神は右旋運動を開始して円満清朗なる宇宙を構造し給へり。ここにおいて両神の活動<sup>はたらき</sup>は無<sup>はたらき</sup>限大の円形を造り給へり。この円形の活動をマの言霊と言ふ、天津真言<sup>まこと</sup>の大根元はこのマの言霊より生まれり。

高銚の神、神銚の神、宇宙に現れ給ひし形をタカ<sup>ア</sup>と言ひ、円満に宇宙を形成し給ひし活動をマと言ひ、このタカ<sup>ア</sup>マの言霊<sup>げんれい</sup>、際限なく虚空<sup>こくう</sup>に拡がりて果てなし、この言霊を八<sup>はやことのを</sup>と言ひ速言男の神と言ふ。両神は速言男の神に言依さし給ひて、大宇宙完成の神業を命じ給ふ。速言男の神は右に左に廻り廻り鳴り鳴りて螺線形をなし、ラの言霊を生み給ふ。この状態を称してタカ<sup>ア</sup>マハラと言ふなり。高天原の六言霊<sup>げんれい</sup>の活動<sup>はたらき</sup>によりて無限絶対の大宇宙は形成され、億兆無数の小宇宙は次<sup>ついで</sup>で形成さるるに至れり。清軽なるもの、霊子の根元をなし、重濁なるものは物質の根元をなし、ここにいよいよ天地の基礎は成るに至れり。

いまだ速言男の神以前の世は宇宙なるもの無く、日月星辰の如き霊的物質<sup>かたち</sup>形をと

<sup>7</sup> 天祥地瑞三版 子の巻 第二章全文にあたる。

めず、虚空<sup>こくう</sup>はただ霊界のみ創造され、物質的分子は微塵だもなかりけるが、この六言  
霊の活用によりて、天界の物質は作られたるなり。これより天地剖判<sup>てんちぼうはん</sup>に至るまで数  
十代の神あり、之を天の世と称し奉る。

天の世は霊界のみにして現界は形だにもなく、じつに寂然たる時代なりき。この高  
天原六言霊の鳴り鳴りて鳴り止まざる活用によりて、大虚空<sup>こくう</sup>に紫微圈なるものあらは  
れ、次第々々に水火を発生して虚空に光を放ち、その光<sup>ひとところ</sup>一所に凝結して無数の霊線  
を発射し、大虚空をして紫色に輝く紫微圈層の世を創造し給ひぬ。紫微圈層について  
蒼明圈層現れ、次に照明圈層、次に水明圈層現れ、最後に成生圈層といふ大虚空に断  
層発生したり。この高さ広さに到底算<sup>かぞ</sup>ふべき限りにあらず、無限絶対無始無終と称する  
より語るべき言葉なし。嗚呼<sup>ああ</sup>惟神<sup>かん</sup>靈<sup>ながら</sup>幸<sup>たま</sup>倍<sup>ちは</sup>坐<sup>は</sup>世<sup>ませ</sup>。

すみきりて清くかしこき天界に

ちよろづ　うま  
千万の神生まれましけり

#### 四 天之高火男の神<sup>8</sup>

主の神は高鋒の神、神鋒の神に言依さし給ひて高天原を造らせ給ひ、南に廻りて中  
央に集<sup>あつま</sup>る言霊を生み、北に廻りては外を統<sup>す</sup>べる言霊を生み、次ぎ次ぎに東北より廻  
り給ひて声音の精を發揮し万有の極元となり、一切の生<sup>な</sup>らざる<sup>ところ</sup> 処<sup>ちから</sup>なき力を生み給ふ。  
この言霊は自由自在に至大天球の内外ことごとくを守り<sup>ひた</sup> 涵し給ひ、宇宙の水火と現  
れ柱となり、八方に伸び極まり<sup>とどおほ</sup> 滞<sup>はつかう</sup>りなし。八紘を統<sup>りくがう</sup>べ六合を開き本末を貫き無限に  
澄みきり澄み徹り、吹く<sup>い</sup> 水<sup>き</sup>火<sup>き</sup>吸<sup>はつきよく</sup>ふ水火の活用によりて八極を統<sup>はつきよく</sup>べ給ふ。此の神力を  
継承して、以後の諸神は高天原の中心に収まり紫微宮圈層に居を定め、一種の水気を  
発射し給ひて雲霧を造り、また火の元子<sup>げんし</sup>を生み給ひ、紫微圈層をして益々清く美しく  
澄み徹らしめ給ひ、狭依男の神を生み給ひて紫微の靈国を無限に無極に開かせ給ひ、  
ここに清麗無比の神居を開き給ひぬ。狭依男の神のまたの御名を天之高火男の神と言  
ふ。いづれもタカアマハラ<sup>かくかく</sup>の言霊より生りませる大神にして神威赫々八紘に輝き給ふ。

<sup>8</sup> 天祥地瑞三版 子の巻 第三章全文にあたる。



天之高火男の神は天之高地火の神と共に、力を合せ心を一にして天の世を修理固成し給ひ、蒼明圈層におりおり下りて、天津神の住所を開かむところに諸々の星界を生み出で給ひて、昼夜間断なく立活き鳴り鳴りて鳴り止まず坐しぬ。天之高火男の神、天之高地火の神の二神はタカの言霊より天界の諸神を生り出で給ひ、莊嚴無比なる紫微宮を造りて主神の神霊を祀り、昼夜敬拝して永遠に鎮まり給ふ。紫微圈界に坐ます万星界の神々は、其数日に月に増し行きて数百億の神人を現し、この圈層の霊界建設に奉仕し給ふ。

これより数百億万年を経て今日に至りたるを思へば、宇宙創造の年代の遠きじつに茫然たらざるを得ざる次第なり。紫微圈層の霊界を称して天極紫微宮界といひ、寸時も間断なくタカタカの言霊輝き、東は西に、西は東に、南は北に、北は南に、上は下に、下は上に鳴り鳴りて鳴り止まざる言霊の元子は、ついに七十五声の神々を生み給ふに至れり。主の神は一点の、より現れ給ひて、ついに大虚空に紫微圈層を完成し、しだいに五種の圈層を生み給ひて霊国を開き、諸神の安住地と成し給ひしぞ畏けれ。嗚呼言霊の玄妙不可思議力よ。

七十余り五つの声を生みまして  
五層の天界創め給ひぬ

## 五 ◎の神声<sup>9</sup>

この至大天球のいまだ成立せざる◎の神時代の天の世は、ただ至大浩々くて氤氳ぎたる極微點<sup>10</sup>の神霊分子が撒霧に撒散て<sup>11</sup>、至大浩々靈々湛々たる極微點分子<sup>12</sup>が

<sup>9</sup> 天祥地瑞三版 子の巻 第四章全文にあたる。

<sup>10</sup> 王仁三郎聖師の学習範囲は日本に伝わった仏教ベースと考えて良いだろう。次の文献を一例とするが、インド哲学では極微をどう見るかが議論されている。一色大悟, 2015. 説一切有部の極微論: 『順正理論』における和集極微の解釈について. 印度学仏教学研究, Vol. 63, No. 2, pp. 138-142. [https://www.jstage.jst.go.jp/article/ibk/63/2/63\\_KJ00009870747/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/ibk/63/2/63_KJ00009870747/_pdf/-char/ja) 極微を、古代インドの長さの単位と簡単に言うことはできないのである。

<sup>11</sup> 「而」を「て」に変更した。これは次に続く「妙々たり」に呼応する。

クク ス 玄々漠々妙々たり。ケケ デ 漂々點々烈々たり，恒々極々鑄々たり，平々運々洞々たり，  
ト ロ ノ 几々白々渺々たり，ツ ツ ル ヌ 剛々神々寂々たり，照々電々精々たり，満々既々着々たり，  
ハ サ ザ 汎々膨々凝々たり，ホ ソ ソ 登々軟々挿々たり，フ ス ス 進々酸々黒々たり，ヘ セ セ 降々責々臨々たり，  
ヒ シ ジ 赤々炭々止々たり，として<sup>13</sup>万性を含有し極乎として純々たり<sup>14</sup>。神代神樂

翁三番叟の謡に、『タータータラーリ，タラリーラー，タラリ，アガリ，ララーリ  
トー，チリーヤ，タラリ，ララリトー』と言ふは，この神秘の転化したる語<sup>15</sup>にし  
て，天の世開設の形容を顕示したるなり。ゆえにこの靈声を総て一言に◎と謂ふ。こ  
の◎声の神靈を明細に説き明かす時は，世界一切の太極本元の真体及びその成立の  
秩序も，億兆万々劫々年度劫大約恒々兮大造化の真象も，逐一明かに資り得らる  
るなり。

けだし◎の言たるや◎にして◎なるがゆえに，すでに七十五声の精靈を完備して，  
純乎として各自皆その真位を保ちつつあり。しかしてその真位と謂ふは，皆両々相向  
ひて遠近皆ことごとく返対力が純一に密合の色を保ちて実相しつつ，至大極乎とし  
て恒々たり，活気臨々として点々たり，いわゆる至大氤氳の気が声と鳴り起むと欲し  
て，湛々の中に神機を含蔵するの時なり。ゆえに世に人たる者はまづ第一にこの◎の

---

<sup>12</sup> このすぐ前に，「極微點の神靈分子」があつて，この極微點に対してコゴロとルビが振られて  
いる。ところが当該個所では，「極微點分子」全体にルビ「コゴロ」が振られている。これは  
ルビ配置の間違いと判断せず，コゴロで「極微點の神靈分子」を代表するという著者の約束事が  
現れているとしたい。

<sup>13</sup> これら六漢字の連なりの意味するところは結局，次の段落に示されている。これら六漢字に  
宛てられたカタカナのルビは，言靈活用の表現例として捉えることもできる。

なお，この六漢字群の頭文字は，カコクケキ，タトツテチ，ハホフヘヒ，と繋がっている。

ちなみに，王仁三郎は，「ア列は天位であるから上を向いて声を出す。オ列ウ列エ列イ列の順  
序で次第に下を向いて声を出す。アオウエイをアイウエオと言ふようになつたのは安倍晴明の頃  
からである」（玉鏡p.147）と書いている。

<sup>14</sup> 置き字である「兮」を和風に「たり」と読ませているので，「兮」の代わりに「たり」とし  
てルビを本文に出した。この作業によって，文章の統一感が得られた。

<sup>15</sup> 助辞「たり」がこの謡のリズムを作っている。音数が3の倍数になっている点以外，六漢字  
の連なりとの対応関係は定かには得られない。聖師はおもにリズムにその共通性をみたのであ  
らう。

いは 謂れを明かに知るべきものとす。なぜなれば◎は 皇<sup>スベラギ</sup>の極元<sup>きよくげん</sup>なればなり。

## 六 言幸比古の神<sup>16</sup>

はやことのを<sup>は</sup>速言男<sup>し</sup>の神<sup>び</sup>は紫微宮<sup>し</sup>圈<sup>び</sup>の世界<sup>し</sup>の万神<sup>り</sup>を指揮<sup>し</sup>し修理固成<sup>し</sup>し、永遠無窮<sup>し</sup>に天<sup>あ</sup>の世界<sup>ま</sup>の  
けいりん 経綸<sup>に</sup>全力<sup>を</sup>を尽し給ひ、ここに造化三神<sup>を</sup>を初め四柱<sup>の</sup>の神<sup>の</sup>の宮殿<sup>を</sup>を造りて、至忠至孝<sup>の</sup>の  
だいどう 大道<sup>を</sup>を顕彰<sup>し</sup>給へり。天<sup>の</sup>の世界<sup>の</sup>の造化三神<sup>とは</sup>、天極紫微宮<sup>に</sup>に坐す天之峯火夫<sup>の</sup>の神<sup>、</sup>  
うがすみ 宇迦須美<sup>の</sup>の神<sup>、</sup>天津日鉾<sup>の</sup>の神<sup>に</sup>に坐まし、左守と仕へ給ふは天津瑞穂<sup>の</sup>の神<sup>、</sup>天津瑞穂<sup>の</sup>の  
神<sup>の</sup>の二神<sup>なり</sup>なり。又右守<sup>の</sup>の神<sup>と</sup>仕へ給ふは高鉾<sup>の</sup>の神<sup>、</sup>神鉾<sup>の</sup>の神<sup>なり</sup>なり。速言男<sup>の</sup>の神<sup>は</sup>  
ひとふたみ 一二三すなはち靈力体<sup>の</sup>の三大元<sup>を</sup>を以て大宮<sup>に</sup>に要する靈<sup>の</sup>の御柱<sup>を</sup>を造り給ひ、この柱<sup>を</sup>を四  
方に建て並べて靈<sup>の</sup>の屋根<sup>を</sup>をもって空<sup>を</sup>を覆ひ、光輝燦然<sup>たる</sup>紫微<sup>の大</sup>の大宮<sup>を</sup>を造営<sup>し</sup>給ひぬ。  
そもそもこの宮<sup>は</sup>天極紫微宮<sup>と</sup>と称へ奉り、造化三神<sup>を</sup>を初め左守右守<sup>の</sup>の四柱神<sup>を</sup>を永  
遠<sup>に</sup>に祭祀<sup>し</sup>給はむが為めなり。

この時靈力体<sup>の</sup>の三元<sup>ス</sup>の言靈<sup>の</sup>の玄機妙用<sup>により</sup>て、紫微宮<sup>の世界</sup>の世界<sup>に</sup>に大太陽<sup>を</sup>を顕現<sup>し</sup>  
給ひ、大虚空中<sup>に</sup>に最初<sup>の</sup>の宇宙<sup>を</sup>を生り出で給ひたるなり。紫微宮<sup>天</sup>天界<sup>の</sup>の諸神<sup>は</sup>幾億万里<sup>の</sup>  
の果よりも集り来りて、大宮造営完成<sup>の</sup>の祝歌<sup>を</sup>を謡ひ給ふ。速言男<sup>の</sup>の神<sup>は</sup>紫微台上<sup>に</sup>  
昇りて声も厳かに、

ひとふたみよいつむゆななやこのたりもちよろづ  
『一二三四五六七八九十百千万』

と繰返し繰返し謡ひ給へば、百雷<sup>の</sup>の一時<sup>に</sup>に轟く如き大音響<sup>四方</sup>四方<sup>に</sup>に起りて、紫微宮<sup>天</sup>天界<sup>は</sup>ために震動<sup>し</sup>  
し、紫<sup>の</sup>の光<sup>は</sup>四辺<sup>を</sup>を包み、太陽<sup>の</sup>の光<sup>は</sup>次第々々に光彩<sup>を増</sup>増し、現今<sup>の</sup>の  
我宇宙界<sup>にある</sup>太陽<sup>の</sup>の光<sup>に</sup>に増すこと約七倍<sup>の</sup>の強さとなれり。速言男<sup>の</sup>の神<sup>は</sup>以上<sup>の</sup>の天<sup>の</sup>  
数歌<sup>を</sup>を唱へ終りて紫微台<sup>の高</sup>高御座<sup>に</sup>に端坐<sup>し</sup>  
し、両眼<sup>を</sup>を閉ぢて天界<sup>の</sup>の完成<sup>を</sup>を祈り給ふ。

ここに速言男<sup>の</sup>の神<sup>の</sup>の左守神<sup>として</sup>仕へ給ふ言幸比古<sup>の</sup>の神<sup>は</sup>、言靈<sup>の</sup>の発動<sup>に</sup>に生れる紫  
微宮<sup>の</sup>の莊嚴<sup>を</sup>を祝して、

『ア オ ウ エ イ  
カ コ ク ケ キ  
サ ソ ス セ シ  
タ ト ツ テ チ

<sup>16</sup> 天祥地瑞三版 子の巻 第五章の前半にあたる。

ナ ノ ヌ ネ ニ  
 ハ ホ フ ヘ ヒ  
 マ モ ム メ ミ  
 ヤ ヨ ユ エ イ  
 ラ ロ ル レ リ  
 ワ ヲ ウ エ 𠩺  
 ガ ゴ グ ゲ ギ  
 ザ ソ ズ ゼ ジ  
 ダ ド ツ デ チ  
 バ ボ ブ ベ ビ  
 パ ポ プ ペ ピ』

と神声朗らかに宣り上げ給へば、天界は益々清く明けく澄切り澄渡りつつウアの  
 神靈元子大活躍を始め、一瞬にして千万里を照走する態 電気よりも速かなりき。こ  
 こに右守の神 言幸比女の神は左守の神の後をうけ給ひて、

『アカサタナハマヤラワガザダババ  
 イキシチニヒミイリ𠩺ギジチビビ  
 ウクスツヌフムユルウグズツブブ  
 エケセテネヘメエレエゲゼデベペ  
 オコソトノホモヨロヲゴゾドボポ』

と七十五声の真言を横に謳ひ給へば、八百万の神々は之に和して謹み敬ひ言霊を奏  
 上し、タカタカと拍手をなして喜び歡ぎ給ひける。

## 七 太祓<sup>17</sup>

天之高火男の神、天之高地火の神の二神は、紫微圈界の国土を經營せむとして、  
 (国土と雖も靈的国土にして、現在の地球の如きものに非ずと知るべし。以下総て之  
 に準ず) 先づ味鋤の神をして紫天界に遣はし給ひぬ。紫天界は紫微宮界の中央に位  
 し、至嚴、至美、至粹、至純の透明国なり。先づ紫天界成り終へて、次に蒼天界形成

<sup>17</sup> 天祥地瑞三版 子の巻 第七章全文にあたる。「第六章 言幸比女の神」は省略されている。  
 この章では主に言霊学的解説が披瀝されている。神系表には直接関係しない。

され、次に紅天界、次に白天界、次に黄天界、次々にかたちづくられたり。本章においてはまづ、紫微圈界におけるその第一位たる紫天界の修理固成につきその大略を説き明すなり。

ウの言霊の御稜威によりて天之道立の神は、その神力を發揮し給ひ、日照男の神、夜守の神、玉守の神、戸隠の神の四柱をして昼と夜とを分ち守らせ給ひぬ。玉守の神は朝を守り、日照男の神は日中を守り、戸隠の神は夕を守り、夜守の神は夜を守り給ひて、天界の経綸を行ひ給ふ。しかしながら紫微圈界にては、夜半と雖も我が地球の真昼よりも明るく、唯意志想念の上に於て夜の至るを感ずる程度のものなり。朝は朝の想念起り、昼は昼、夕は夕の意志想念に感ずる程度なり。我が地球の如く明暗さだかならざるも、靈的天界なるが故なり。

天之道立の神は諸神を従へて、紫微圈界に於ける数千億万里の靈界を非常の速力をもつて経繞り、神業に活躍し給へり。至美、至明、至尊、至嚴の靈国も、燃ゆる火の焰の末より出づる黒煙の如く、鈍濁の氣凝り固まりて、美醜善惡の次第に區別を生じ、最初の神の意志の如く永久に至善、至美、至尊、至嚴なること、全体において能はざるに至れるも、靈的自然の結果にして、いかに造化の神徳と雖も、此の醜惡を絶滅する余地なかりしなり。

すべて宇宙一切のものには靈的にも、体的にも表裏あり、善惡美醜混じ交はりて、しかして後に確乎不動の靈物は創造さるるものなり。神は至善至美至愛にましませども、年処を經るに従つて醜惡分子の湧出するは、あたかも清水の長く一所に留まれば、次第に混濁して腐敗し、昆虫を發生するが如し。

天之道立の神は、主の神の至善、至美、至愛の靈性を摂受し給ひて、紫天界を円満清朗にかつ幸福に諸神を安住せしめむと、昼夜守りの四神をして神事を取り行ひ給へど、惟神自然の真理は如何ともするに由なく、さしもの紫天界にも、かなた、こなたの隅々に妖邪の氣発生し、やうやく紫天界は擾乱の国土と化せむとせり。ここに天之道立の神は、この形勢を深く憂慮し給ひて、天極紫微宮に朝夕を詣で、天の數歌を奏上し、かつ三十一文字をもつて、妖邪の氣を剿滅せむと図り給ふぞ畏けれ。

天之道立の神は黄金の肌麗しく、裸体にて神前に神嘉言を奏上し給ふ。（紫微圈界は最奥天界にして、ここに住する神々は総て裸体にましませり。しかりといへども身心共に清淨無垢にましませば、現在地球人のごとく醜態を感ずることなく、裸体その

ものが、かへつて美しく、かつ莊嚴に輝き給ふなり。よつて最奥天界，第一天界の神人はいづれも裸体に在す事は，今日迄の靈界物語において説明したるごとし)

『掛巻も綾に畏きむらむらさきの，極微点輝き，美しき宮居にます主の大神の大御前に<sup>いわひつかさ</sup>斎司，天之道立の神，謹み敬ひ畏み畏み願ぎまつる。そもそもこの紫微圈界は，主の大神とます天之峯火夫の神，宇迦須美の神，天津日鉾の神三柱の広き深き雄々しき御稜威により，<sup>ひとふたみ</sup>一二三の力もてうまらにつばらに<sup>18</sup>造り固め給ひけるを，日を重ね，月を<sup>けみ</sup>閲し，年を経るままに御世はややややに濁り曇らひ，いとも美しく，嚴かなるべき紫天界の至るところに心汚き神々の現れ来りて，主の大神の<sup>おおみこころ</sup>大御心に背きまつり，<sup>みこく</sup>神国を乱しまつる事のいとも畏く，いみじくあれば，夜の守り，日の守りと四柱の神を四方にくまりて教へ諭し守りまつれど，あまりに広き国にしあれば，いかで<sup>また</sup>全きを望み得む。さはあれ吾等は神の大宮に仕へまつる身にしあれば，天津誠の大道をうまらにつばらに説き明し，もろもろの荒ぶる神達を言向け合はし，大御神の<sup>みいづ</sup>御稜威をかかぶりて紫天界は神の造らし昔にかへり，曇りなく濁りなく，<sup>まがけ</sup>曲の氣だに止めじと，祈る誠を聞き召し，吾に力を与へ給へ。惟神神の大前に一二三四五六七八九十百千万布留辺由良，布留辺由良由良と<sup>ぬさ</sup>幣打ち振り，<sup>ひれ</sup>比礼打ち<sup>なび</sup>靡け，<sup>おほみかぐら</sup>大御神樂を奏でつつ，<sup>ゆんで</sup>左手に<sup>みすず</sup>御鈴を打ちふり，<sup>めて</sup>右手に<sup>しちじふご</sup>幣ふりかざし，七十五声の言靈をうまらにつばらに宣りまつる。この有様を平けく安らげく聞き召し相諾ひ給へと，畏み畏みも願ぎまつる』

かく<sup>ふとのりと</sup>太祝詞を宣り給へば，紫微宮の<sup>しこん</sup>紫金の扉はキーキー，ギーギーと御音清しく左右にあけ放たれ，ここにキの言靈は鳴り出で，次にギの言靈鳴り出でましぬ。是より四方の<sup>ももがみ</sup>曲津を斬り払ひ，清め澄まし，天清く，神清く，道また清く，百神の濁れる心は清まりて紫微天界は次第々に妖邪の氣消え失せにける。さりながら大前に神嘉言一日だも怠る時は再び妖邪の氣湧き出でて世を曇らせ，諸神は<sup>あら</sup>荒び乱るるに至るこそ是非なけれ。

ここに天之道立の神は，朝夕のわかちなく，神を祭り，言靈を宣り，妖邪の氣を払はむとして払ひ，言葉の<sup>いさを</sup>功のいやちこなることを悟り，初めて太祓ひの道を開き

---

<sup>18</sup> 「うまらにつばらに」の宛てられた漢字，忼<sup>18</sup>に委曲に，のうち，最初の「忼」は現在登録されていないので，平仮名で表示することにした。完全無欠を意味するのであろう。

給ひしこそ畏けれ。再拜。

生き生きて生きの果なき天界の  
姿は人の眼には写らじ

果てしなき紫微天界の神々は  
祓<sup>ごと</sup>ひ言のみいそしみ給へり

## 八 国生み神生みの段<sup>19</sup>

天の道立の神は、紫微の大宮の清<sup>すがには</sup>庭に立ちて布留辺由良、布留辺由良と大幣を振り給へば、紫微天界の西南の空を<sup>こが</sup>焦して入り来る神あり。その御姿は百有余<sup>みすがた ひやくゆうよじゆん</sup>旬<sup>20</sup>の大鰻の姿にして、肌滑らけく青水晶の如く、長大身ながらも<sup>ひれふ</sup>拝しまつりて權威の心を起さず、寧ろ敬慕の念に満たされつつ、天之道立の神は紫微の大宮に<sup>ひれふ</sup>齧伏して、  
『来ります神は何神なりや』

と<sup>しんりよ</sup>神慮を伺ひまつりけるに、

『天之峯火夫の神言もちて、今より来る神は<sup>おほもとあきつを</sup>太元顯津男の神』  
と宣らせ給ひぬ。太元顯津男の神は紫微圈界の成出でし最初にあたり、大虚空の西南に位置を定め、百の神業を司り給ひしが、やうやく大神業を仕へ終へ給ひし折もあれ、天之道立の神の生言靈の祓ひの神業に感じ給ひて、ここに寄り来ませるなりき。太元顯津男の神は横目立鼻の神人と化し給ひ、大宮の御前に額づきて宣り給はく、

『我は主の神の神言もちて、西南の空を修理固成し終れり。我この後はいかにして

---

<sup>19</sup> 天祥地瑞三版 子の巻 第八章全文にあたる。

<sup>20</sup> 旬という長さの単位は無いと考えると良いだろう。由<sup>ゆじゆん</sup>旬はあり、須弥山の高さは、8万由旬となっている。<http://ja.dbpedia.org/page/由旬> によれば、「古代インドにおける長さの単位。踰繕那とも書く。「くびきにつける」の意で、牛に車をつけて1日引かせる行程」とあり、「仏教では1拘盧舍(俱盧舍ともいう)(クローシャ。500尋と同じともいわれる)が1000弓(ダヌ。4000ハスタと同じ。俱舍論では500弓(後述))、そして4拘盧舍(俱舍論では8俱盧舍(後述))が1由旬とされているので、1由旬は7.2kmとなる」とある。聖師の表現の「旬」を時間単位の10日とすると、「牛に車をつけて10日引かせる行程」と解釈することも可能かと思われる。

神業に仕へまつらむや、うまらにつばらに事依さし給へ』

と、天津誠の言霊をもて祈らせ給へば、紫微の宮居の扉は再び静に開かれて、茲に高銚の神、神銚の神、四辺を紫金色に照させながら、儼然として宣りたまはく、

『宜なり宜なり太元顕津男の神よ。我主の神の神言もちて汝に宣り聞かす事あり、慎み畏み神業に仕へまつれよ。これより東北万里の国土に於て天界経綸の聖場あり、称して高地秀の峯といふ。この高地秀の峯こそ我主の神の出でませし清所なれば、汝は一時も早く高地秀の峯に下りて紫天界の経綸に仕へまつれ。八百万の神を汝に従へてその神業を助けしめむ』

と、右手に大幣を打ちふり、左手に百成の鈴を打ちふり給ひつつ、殿内深く隠れ給ひぬ。ここに太元顕津男の神は天之道立の神に深く感謝の意をのべながら、時遅れじと再び長大身に還元しつつ、光線の速さよりも速く、見る見る姿を隠させ給へり。

太元顕津男の神は、天の高地秀の山に下り給ひつつ、ここに造化の三神を斎ひ祭り、朝な夕に誠心の極みを尽し、言霊の限りを竭して、天界の平和幸福を祈らせ給ふ。紫微圏界に坐す主の大神の御稜威によりて、平らけく安らけく清く明けく治まりたれども、百万里東方の国土は未だ神徳に潤はず、漸く妖薜の気群がり起り、神々は水火の呼吸の凝結より漸く愛情の心を起し、神生みの業は日々に盛になりたれども、善悪相混じ美醜互に交はる惟神の摂理によりて、遂に混濁の気国内に満ち、万の禍群れおきむとせしを甚く歎かせ給ひ、高地秀の大宮に百日百夜間断なく祈り給へば、主の神はここにも再び現れまして神言厳かにのたまはく、

『汝これより国生み、神生みの神業に仕へまつれ。その御樋代として八十の比女神を汝に従はしめむ』

と宣り給へば、太元顕津男の神は主の神の神宣のあまりの畏さに、応へまつる言葉もなく、宮の清庭に齧伏して直ひたすらに驚き打ち慄ひ給ひける。

主の神より太元顕津男の神に対し八十比女神を授け給ひしは、神界経綸につきて深き広き大御心のおはしますことなりけり。天界においてもやうやくここに横目立鼻の神人現れ、愛欲に心乱されて至善至美至愛の天界も濁り曇らひければ、その汚れを払はむとして至善、至美、至粹、至純、至仁、至愛、至厳、至重の神霊を宿し給ふ太元顕津男の神に対して、国魂の神を生ましめむとの御心なりける。たとへば醜草の種は



生え安く茂り安くして世に寸効もなく、道を塞ぎ悪虫を生じ足を容るる処なきまでに至るを憂ひ給ひて、至粹至純なる白梅しらうめの種を植ゑ広めしめむと、八十比女神を御樋代に、国の守りと国魂神をみこころを生ませ給はむ御心なりける。曇り乱れの種を天界に蒔き広むる時は益々曇り乱れ、遂には神明の光も知らざるに至るものなり。

言靈みいきの水み火きに天界発生し

百の神達うま生れますなり

山も川も大海原も言靈の

神の水あ火あに生れ出でしものよ

## 九 香具の木の實<sup>21</sup>

紫微天界、最奥靈国紫微の宮居に鎮まり居ます主の大神、天之峯火夫の神は、宮の清庭に弥茂り弥栄えつつ非時ときじく花咲き実る香具この木の實を、左守の神に命じてむしり取らせ給へば、その数すうや八十そに追およべり。

ここに主の神は虚空にスの言靈を鳴り出で給ひて、香具の木の實を右手に握らせ呼吸いきを吹きかけ給へば、艶麗なる女神の靈御口たまおんくちより生り出でまして香具の木の實に移らせ給ひ、ここに艶麗なる女神の姿生り出でましぬ。この女神の名は高野比女たかのひめの神<sup>22</sup>と申す。次に一つの木の實を手握り玉の清水そそに滌ぎ給ひて御息を吹きかけ給へば又もや女神成り出で給ふ。之を寿々子比女すずこひめの神と申す。かくして八十の香具の木の實は、いづれも天下経綸の御柱として貴の女神と現れ出でませり。

御鈴みすずふる巖の言靈幸はひて

八十比女神は現れましにけり

主の神は貴の木の實にみいきかけて

天界経綸の種を生ませり

<sup>21</sup> 天祥地瑞三版 子の巻 第九章全文にあたる。

<sup>22</sup> 大本顕津男の神の正妃高野比女の神は、左守の神に命じてむしり取られた八十の香具の木の實に入る筈であるが、高野比女の神を入れると全部で八十一柱になってしまう。

国生みの神の神業のなかりせば  
この天地は開けざるべし  
顕津男の神の国生み御子生みは  
大経綸の基なりけり  
国を生み又天を生み神を生み  
人の子生める顕津男の功<sup>いさを</sup>  
非時の香具の木の実は主の神の  
スの味ひをもてるなりけり  
顕津男の神の神言は八十比女を  
御樋代として国をひらけり  
国々の国魂神を清らけく  
生みおほせたる八十の比女神  
比女神の生みの功は大宇宙  
大千世界をやすく照せり

ここに太元顕津男の神は、主の神の神言<sup>みこと</sup>かしこみ高野比女の神にみあひて、高地秀の宮に永久<sup>とこしへ</sup>に鎮まり居まし、国を拓き神ををさめ、水火<sup>すゐくわ</sup>の呼吸をくみ合せもやひ合せて雲を生み、雨を降らせて、あらゆる天界に湿りを与へ給へば、国土に万物発生し、天の狭田長田に瑞穂の稲は実り木の実は熟し、大嘗<sup>おほなめ</sup>の神業<sup>みわざ</sup>漸く完成を告げ給ふ事とはなれり。

顕津男の神は主の神の神言かしこみて宇都子比女の神、朝香比女の神、梅咲比女の神、花子比女の神、香具の比女の神、小夜子比女の神、寿々子比女の神、狭別<sup>さわけ</sup>の比女の神を近く侍らせ神業に奉仕せしめ給ひぬ。これを八柱の女神となも言ふ。この外七十<sup>ほかななそ</sup>まり二柱<sup>23</sup>の比女神を紫微宮界の東西南北、遠近の国土に配りおきて<sup>24</sup>、神の御樋代となし、大経綸を行ひ給ひしぞ畏けれ。

<sup>23</sup> 日本国語大辞典に、宇津保（970-999頃）藤原の君「人は十五人、漬豆をひとさやあてに出だすともたうまりいつつなり」という文例がある。70+2=72の意。

<sup>24</sup> 紫微宮には天祥地瑞神系表に示されたように、天の世造化三神のお宮なので、もちろん、七十二柱は、紫微宮界の外の東西南北、遠近の国土、に配り置かれた。『天祥地瑞』では、八十姫神と表現されている。寿々子比女以下、八柱の女神、は八十姫神とは表現されていない。

## 十 紫微の宮司<sup>25</sup>

天の道立の神はここに主の神の大神言をもちて、紫天界の西の宮居の神司となり、遍く神人の教化に専念し給ひ、天津誠の御教をうまらにつばらに説き給ひ、太元顕津男の神は東の国なる高地秀の宮に神司として日夜奉仕し給ひ、右手に御剣をもたし左手に鏡をかざしつつ、靈界における靈魂、物質両面の 守護に任じ給ひたれば、その神業において大なる相違のおはす事はもとよりなり。いかに紫微天界と雖も清浄無垢にして至賢至明なる神人数多おはさざれば、その統制につきては、いたく神慮を難ませ給ひたり。

天の道立の神は個神<sup>こしん</sup>々々についての誠を教へ給ひ、太元顕津男の神は宇宙万有に対しての教化を司り給ひけるが、西の宮の教は意外に凡神の耳に入り易く、且つ誠を誠として認め得るに反して、東の宮の御教は範圍廣大にして小事にかかはらず、万有修理固成の守護なれば、いづれも凡神の耳に入り難く、遂には配下の神々の中よりも反抗者現れ来りて、顕津男の神をなやまし奉る事一再ならざりける。顕津男の神は表に個神の悟り得べき西の宮の教を唱導し、聰明なる神人に対しては天下経綸の大業を説き明したまへば、その苦心<sup>ひとかた</sup>また一方ならざりき<sup>26</sup>。

## 十一 水火の活動<sup>27</sup>

大宇宙間に鳴り鳴りて、鳴り止まず、鳴りあまれる巖の生言靈ス声によりて、七十五声の神現れ給ひしことは、すでに前述のごとし。

スの言靈は鳴り鳴りて、つひに大宇宙間に火と水との物質を生み給ふ。そもそも一切の靈魂物質はいづれもスの言靈の生むところなり。しかして火の性質は横に流れ、水の性質は縦に流るるものなり。ゆえに火は水の力によりて縦にのぼり、また水は火

---

<sup>25</sup> 天祥地瑞三版 子の巻 第一章の短歌が連なるまでの散文表現の部分にあたっている。

「第一〇章 嫁ぎの御歌」は省略されている。このことから、本報告が言霊学というより天祥地瑞神系表の説明に特化されていることを知ることができる。

<sup>26</sup> 本章のこれより後のかなりの部分は省略されている。

<sup>27</sup> 天祥地瑞三版 子の巻 第二章にあたる。本文の意を確認するための後半の30歌は省略されている。

の横の力によりて横に流る。昔の言霊学者は火は縦にして、水は横なりと言へれども、その根元に至りては然らず、火も水なければ燃ゆる能はず光る能はず、水もまた火の力添はざれば流動する能はず、ついに凝り固まりて氷柱となるものなり。冬の日の水は火の気の去りし水の本質なり、この理によりて水は縦に活用をなし、火は横に動くものなる事を知るべし。

天界における光彩炎熱も内包せる水気の力なり。紫微天界には大太陽現れ給ひて左旋運動を起し、東より西にコースを取るのみにして、西より東に廻る太陰<sup>28</sup>なし。炎熱猛烈にして神人を絶対的に安住せしむる機関とはならざりしかば、ここに太元顕津男の神は高地秀の峯にのぼらせ給ひ、幾多の年月の間、生言霊を奏上し給へば、大神の言霊宇宙に凝りてここに大太陰は顕現されたるなり。しかして大太陰は水気多く火の力をもつて輝き給へば、右旋運動を起して西より東にコースをとり、天界の神人を守らせ給ふ。天之道立の神は大太陽を機関として、凡百の経綸を行ひ給ひ、太元顕津男の神は大太陰を機関として宇宙天界を守らせ給へば、ここに天界はいよいよ火水の調節なりて以前に勝る万有の栄を見るに至れり。

太元顕津男の神は大太陰界に鎮まり給ひて至仁至愛の神と現じ給ひ、数百億年の末の世までも永久に鎮まり給ふぞ畏けれ。至仁至愛の大神は数百億年を経て今日に至るも、若返り若返りつつ今に宇宙一切の天地を守らせ給ひ、今や地上の覆滅せむとするに際し、瑞の御霊の神霊を世に降して更生の神業を依さし給ふべく、肉の宮居に降りて神代に於ける御活動そのままに、迫害と嘲笑との中に終始一貫尽し給ふこそ畏けれ。

大太陽に鎮まり給ふ大神を厳の御霊と称へ奉り、大太陰界に鎮まりて宇宙の守護に任じ給ふ神霊を瑞の御霊と称へ奉る。厳の御霊、瑞の御霊二神の接合して至仁至愛神政を樹立し給ふ神の御名を伊都能売神と申す。即ち伊都は厳にして火なり、能売は水力、水の力なり、水はまた瑞の活用を起してここに瑞の御霊となり給ふ。紫微天界の開闢より数億万年の今日に至りていよいよ伊都能売神と顕現し、大宇宙の中心たる現代の地球（仮に地球といふ）の真秀良場に現れ、現身をもちて、宇宙更生の神業に

---

<sup>28</sup> ここでは、「西より東に廻る太陰なし」とされ、このすぐ後に、「大太陰は（中略）西より東にコースをとり」とされる。大太陽との対比で大太陰が用意されるのは理解できるが、「西より東に廻る太陰なし」に関わる設定は理解できないところである。

尽し給ふ世とはなれり。

## 十二 国生みの旅<sup>29</sup>

火は水の力によりて高く燃え立ち上りその熱と光を放ち、水はまた火の力によりて横に流れ低きにつく、これを水火自然の活用と言ふ。火も水の力なき時は横に流れて立つ能はず、水はまた火の力なき時は高く上りて直立不動となりて、その用をなさず。霧となり、雲となり、雨となりて、四方の国土を湿ほすも皆水の靈能なり。火を本性として現れ給ふ巖の御霊を天之道立の神と申すもこの原理より出づるなり。つぎに太元顕津男の神と称ふるも、水気の徳あらゆる万有に浸潤してその徳を顕すの意なり。ゆえに天之道立の神は紫微の宮居<sup>30</sup>に永久に鎮まりて経の教を宣り給ひ、太元顕津男の神は高地秀の宮に鎮まりまして、四方の神々を初めあらゆる国土を湿ほし給ふ御職掌なりける。ゆえに主の大神は太元顕津男の神に対し、国生み神生みの神業を依さし給ひて、八十柱の比女神を御樋代として顕津男の神に降し給ひ、ことに才色勝れたる八柱の神を選びて御側近く仕へしめ給ひしは、天界経綸の基礎とこそ知られけり。

ここに顕津男の神は天理に暗き百神達の囁きに堪へ兼ね給ひて、尊き神業に躊躇し給ひけるが、主の神の大神宣黙し難く、紫微の宮居に参ひ詣で、天之道立の神に我もてる職掌をうまらにつばらに宣り給ひしかども、素より火の本性を有たす神なれば、顕津男の神の神言を諾ひ給はず、紫微の宮居の百神達も言葉を極めて顕津男の神の行動を裁きまつりければ、ここに御神は深く心を定めつつ、高地秀の宮に帰らせ給ひ、一柱の侍神も伴はず、月光る夜半を独りとぼとぼ立出でまし給へば、白梅の香ゆかしく咲き香ふ栄城山横はる。ここに顕津男の神はほつと御息をつかせ給ひ、栄城山

---

<sup>29</sup> 天祥地瑞三版 子の巻 第一五章全文にあたる。「第一章 神の述懐歌〔一〕」、 「第四章 神の述懐歌〔二〕」の二章は省略されている。

<sup>30</sup> 「天之道立の神は紫微の宮居に永久に鎮まりて」という記述と、「紫微の宮居の百神達も言葉を極めて顕津男の神の行動を裁きまつりければ、ここに御神は深く心を定めつつ、高地秀の宮に帰らせ給ひ」との記述から、「高地秀の宮」が「紫微の宮居」に属さないことは明確である。神系図では、天之道立の神のお宮は、「天の御柱の大宮」であり、「高地秀の宮」と同列であるはずであり、もちろん、紫微宮ではないはずである。

の頂に登りて、日月両神を拝し天津祝詞を奏上し、我神業<sup>みわぎ</sup>の完成せむ事をうまらにつばらに祈り給ひける。

顯津男の神は尾上<sup>おのへ</sup>に茂る常磐木の松を根こじにこじ、白梅の香る小枝を手折らせ給ひて松の梢にしばりまし、右手に手握り<sup>31</sup>左手の掌に、夜光の玉を静<sup>しづか</sup>に柔<sup>やわら</sup>かに捧げ持たし、松梅の幣<sup>みてくら</sup>を左右左に打振り打振り御声<sup>みこゑ</sup>爽かに祈り給ふ。その神言<sup>みことたま</sup>靈はたちまち天地に感動し、紫微天界の諸神は時を移さず神集ひに集ひまして、顯津男の神の太祝詞言<sup>ふとのりとごと</sup>を謹み畏み聴聞し給ふ。

『掛けまくも綾に畏き久方の、神国の基<sup>もとみ</sup>とあれませる天の峯火夫の神は、澄みきり澄みきり主の言<sup>み</sup>靈<sup>いき</sup>の神水火をうけて、空高くあらはれ給ひ、心を浄め身を清め、いよいよここに紫微天界を初めとし、外<sup>ほか</sup>に四層の天界をうまらにつばらに生り出でましぬ<sup>32</sup>。紫微天界の要<sup>かなめてんきよくしび</sup>天極紫微の宮を見たて給ひ、これを天の御柱の宮<sup>33</sup>となづけ給ひて、天之道立の神に靈界の事をうまらにつばらに任せ給ひ、神の御代をば開かせ給へと、つぎつぎ曇る天界のこの有様<sup>みそな</sup>を覽<sup>み</sup>はし、我を東につかはして、高地秀山に下らせつ、ここに宮居を造るべく依さし給へば、ひたすらに畏みまつり、天津国の遠き近きに聳<sup>そび</sup>えます、山の尾上や谷々の、茂木<sup>しげき</sup>の良き木<sup>えら</sup>を撰み立て、本打切り未打断ちて、貴の御柱削り終へ、高天原に千木高知りて、我は朝夕仕へまつりぬ。百神達は紫微の宮居に对照して東の宮と呼ばはりつ、伊寄り集ひて大前に、朝な夕なの神嘉言宣り上げまつる折もあれ、主の大神は厳かに、東の宮居に下りまし、国の御柱の大宮と名を

---

<sup>31</sup> 「右手に手握り」の表現について： 国語辞典に、ねこじは根掘で、「樹木などを根のついたまま掘り取ること」とあり、根のついたままの松の幹の頂部に白梅の香る小枝を縛り付けた「松梅の幣」（後述）を右手に握った、ということを表している。

<sup>32</sup> 神系表の核になる部分に対応している。この文だと、天の峯火夫の神の創造に関わっているのは、この核になる部分で、紫微天界最奥靈国とその周囲4層、紫天界と蒼天界の間、蒼天界と紅天界の間、紅天界と白天界の間、白天界と黄天界の間である。

<sup>33</sup> 「紫微天界の要天極紫微の宮を見たて給ひ、これを天の御柱の宮となづけ給ひ」をそのまま受け取ると、神系表の中心の「天之世造化三神」のお宮が、「天の御柱の宮」となってしまう。神系表ではそうは表現されず、「天極紫微の宮」から外れた領域に、「国の御柱の大宮」と並列して示されている。つまり、『天祥地瑞』の記述との間に齟齬がある。これをどのように考えればいいのか。

賜ひたる尊さよ。ここに主の神もろもろの<sup>おおみしぐみ</sup>大御経綸<sup>ま</sup>と任せ給ひ、あらゆる国を治むべく国魂神を生まれよと、八十柱の比女神<sup>34</sup>を我に下して、御空高く元津御座に帰りましましぬ。我はもとより瑞御霊、一所に留まるべきにあらねば、<sup>あ</sup>栄城山の上<sup>へ</sup>に今立ちて、四方の神々さし招き、<sup>つとめ</sup>職掌を委曲に、百の神々司神に今あらためて宣り告ぐる。百神達は主の神の、神言をうけし我言葉、うまらにつばらに聞召し、<sup>のりごと</sup>巖の御霊は言ふも更、瑞の御霊の<sup>のりごと</sup>宣言も、浜の千鳥と聞きながさず、心の奥に納めおきて、我神業を救へかし。嗚呼惟神々々、天津真言の言霊もて心の丈を告げまつる』

かく謡ひ終り給へば、百神達は何の<sup>いら</sup>答へもなく<sup>いら</sup>齧伏して合掌するのみ。時しもあれや<sup>す</sup>主の神の<sup>す</sup>主の言霊は<sup>よも</sup>四方に響き渡り、微妙の音楽非時間えて、その莊嚴さ愉快さ譬ふるにものなし。迦陵頻伽は満山の白梅に<sup>たわわ</sup>枝も<sup>あつま</sup>撓に<sup>びおん</sup>集り来りて美音を放ち、鳳凰は幾百千ともなく<sup>かなたこなた</sup>彼方此方の天より<sup>さかきのやま</sup>集り来り、<sup>さかきのやま</sup>栄城山の上空を悠々翔けまはるさま、実に最奥天国の有様なりける。

ここに大御母の神は、数多の神々を従へ数百頭の麒麟を率みてここに現れ給ひ、山頂の広場に整列して、<sup>あ</sup>顯津男の神の門出を祝し給ふ。ここに<sup>あ</sup>顯津男の神は大御母の神の<sup>あ</sup>奉りし麒麟に<sup>た</sup>跨り山路を下り給へば、大御母の神を初め百神達はおのもおのもと麒麟の背に<sup>た</sup>跨り、その他は<sup>た</sup>鳳凰の翼に<sup>が</sup>駕して<sup>が</sup>従ひ給ふ。大太陽の光は益々強く、大太陰は慈光を放ち、清涼の気を送りて<sup>しょうちよう</sup>炎熱を<sup>しょうちよう</sup>調和し給ひ、水火和合の<sup>しょうちよう</sup>祥<sup>しょうちよう</sup>徴<sup>しょうちよう</sup>実現して、紫微天界はたちまち浄土の光景を現じける。再拝

---

<sup>34</sup> この八十柱の比女神は、正妃高野比女の神のさらに他にという表現になっていると考えられるのである。

## (1) 高日の宮 (高照山) <sup>35</sup>

月の大神の神靈<sup>しんれい</sup>瑞<sup>みたま</sup>の御靈太元顯津男の神，栄城山<sup>さかきのやま</sup>を下り，大御母<sup>おほみはは</sup>の神<sup>た</sup>その他の諸神に送られて，神生み国生みの旅に就かせ給ひ，横たわれる東北の国原を指して夜を日に次いで進ませ給ふ。途中天の八洲河を東の岸に安々と渡り高照山の聖地をさして道の隈手も恙なく<sup>36</sup>，須佐の川辺に着き八十比女神の<sup>ゆくえひめ</sup>一柱如衣比女神に会ひ，この女神のママムメミの言靈ゆ生まれたる銀の駒，天龍<sup>てんりゅう</sup>にまたがり進み給ひ<sup>37</sup>，眼知男<sup>まなこしりを</sup>の神に迎えられ高照山の山麓，高日の宮の宮の清所<sup>すがど</sup>につき給ふ<sup>38</sup>。

ここに顯津男の神，如衣比女神の二柱神は大御母の神のとりもちによりて高日の<sup>やひろどの</sup>八尋殿に目出度<sup>めでたく</sup>婚ぎの式をとり行ひ給ひ，美玉姫命<sup>みたまひめ</sup>を生み給ひ，八十年の間これの宮居に鎮り給ひぬ。言靈の水<sup>みづ</sup>火より成り出でましし神靈をすべて神と称へ，神と神との婚ぎによりて生れませる神靈を命と言ふ<sup>39</sup>。仕え奉りし神々は<sup>あけはるを</sup>明晴男の神，<sup>ちかみを</sup>近見男の神<sup>40</sup>，<sup>ス</sup>日の本の神<sup>41</sup>，大物主の神<sup>42</sup>，片照の神<sup>43</sup>，眞澄の神<sup>44</sup>にましましき。

如衣比女の神は高照谷の中津瀧にて禊し給ふ折しも頭に鹿のごとき大なる角を生したる<sup>おろち</sup>大蛇に吞まれて身失せ給ひぬ<sup>45</sup>。ここに高日の宮の神司等は如衣比女の靈を厚く慰め終りて，中津瀧の大蛇を<sup>ことむ</sup>言向けやはすべく，大御母の神，大物主の神，明晴男の神，眼知男の神，眞澄の神等他百の神々を伴いて，愛善の眞の言靈によりて言向け給ひぬ。大蛇は百神の生言靈にうたれ，蘇りつつ天高く立ち去りにける<sup>46</sup>。

<sup>35</sup> 天祥地瑞第七十三巻の第一六～二五章の要約となっている。

<sup>36</sup> 以上，第一六章。

<sup>37</sup> 以上，第一七章。

<sup>38</sup> 以上，第一八章。

<sup>39</sup> 命の定義は，第二三章。

<sup>40</sup> 以上，第一九章～第二二章。

<sup>41</sup> 第二四章。

<sup>42</sup> 大物主の神は，第二二，二四章，二五章。

<sup>43</sup> 第二四，二五章。

<sup>44</sup> 第二四，二五章。

<sup>45</sup> 以上，第二四章。

<sup>46</sup> 以上，第二五章。



## (2) 玉泉郷 (東雲の国) <sup>47</sup>

高日の宮の神司太元顯津男の神は、主の神の蔽の言霊かかぶりて猛き心の駒立て直し、大御母の神、眼知男の神、味豊の神、輝夫の神を高照山の麓、高日の宮の神司と定め置きて、大物主の神、近見男の神、真澄の神、照男の神を伴ひ、天の白駒に跨がり、国魂神を生まばやと、心いそいそ東の国へ出で給ふ<sup>48</sup>。

途中 <sup>よこた</sup>横 <sup>ひむか</sup>われる日向の大河を河守比女の神の奉れる駒にまたがり彼方の岸に着き給ひ、<sup>かわもりひめ</sup>河守比女の神に案内され<sup>しのめ</sup>東雲の国<sup>ぎよくせんきやう</sup>の玉泉郷の神館に入り給ひ<sup>49</sup>、顯津男の神は八十比女神の一柱、<sup>よつかさひめ</sup>世司比女の神にみあい給ひて国魂、<sup>ひむかひめ</sup>日向姫命を生み給ひぬ。ここに顯津男の神は大物主神に玉泉郷の神館を守らせ給ひ東雲の国の東を明晴の神に、西の国は照男の神、北の国は真澄の神、高照山の南方は近見男の神に任せ依さし、国造りの神業に仕へ給ひぬ。顯津男の神は日向姫命の神人を世司比女の神、大物主の神に頼みおき、河守比女の神に厚く謝辞をのべ、南をさして、ただ一騎出でまし給ふ<sup>50</sup>。

## (3) 玉手の宮 (三笠山)

千里の野路を渡り終え、ここに広河に着き給ふ。日向河に比ぶれば約二〇分の一の <sup>ながれ</sup>流 ながら、相当広く、水瀬深きを近見男の神の求め来たりし駒に跨がり、十一柱の神を従へて渡り給ひぬ。ここに太元顯津男の神は近見男の神、<sup>まるやひこ</sup>圓屋比古の神の神達十一柱を率ゐ、三笠山の聖場玉手の宮に漸く着かせ給ひける<sup>51</sup>。

遠く眺めやる <sup>かすみ</sup>霞 の三笠山は、案に相違し百花千花全山に咲きみちて、その麗しさ言はむかたなく、天国のさまを目のあたりにあらわしぬ。<sup>うつしよひめ</sup>現世比女の神の <sup>しずま</sup>鎮りいますてふ玉手の宮は <sup>ゑんえん</sup>蜿蜿として延び広がり、<sup>ときは</sup>磐 の老松枝を交へてこの清宮をこんもりと囲み、金砂銀砂は月日の光を浴びて、目もまばゆきばかり輝き渡り、鳳凰巢ぐひ、迦陵頻伽は常世の春を謳ひつつ、天国浄土の光景を現あらはしつつあり。

<sup>47</sup> 天祥地瑞第七十三巻の第二九～三五章の要約となっている。

<sup>48</sup> 以上、第二九章。

<sup>49</sup> 以上、第三〇章。

<sup>50</sup> 以上、第三一～三五章。

<sup>51</sup> 以上、第三六、三七章。

館を守る三笠比女の神に導かれて出迎へたのは、艶麗にして威厳の備わる貴の女神、現世比女の神（八十比女神の一柱）であった。ここに顕津男の神は婚ぎの神業を終へ給ひ、生れませる御子を、玉手姫の命と名づけ給ひて、圓屋比古の神をこれの宮居の神の司と定め給ひ、三笠比女の神に、生れませし御子玉手姫の命の養育を頼み置き、現世比女の神に名残りを惜しみつつ、再び西南の国をさして、近見男の神その他を伴ひ出でまししが、その道すがら天之御中の神<sup>52</sup>にあひ給ひて、相共に神業のため進ませ給ひぬ<sup>53</sup>。

#### （４）玉野宮居（玉藻山）<sup>54</sup>

##### （４a）真鶴新国

顕津男の神の率ゐます近見男の神、圓屋比古の神、その他九柱の御供の神の御名は多々久美の神、国中比古の神、宇礼志穂の神、美波志比古の神、産玉の神、魂機張の神、結比合の神、美味素の神、真言殿の神と申す<sup>55</sup>。

国中比古の神は瑞御霊のお許しを得て真鶴の山に先発された。途中、顕津男の神は濁り河の濁りを言霊の力で清めて、ここに圓屋比古の神を先頭に、十一柱の神は水瀬をやすやす向ふ岸に着き、おのおのの馬に水飼ひ、草を喰せ終り、おのおのサソスセシの言霊の水火を呼吸し、腹をふくらせ寝に就き給ひぬ<sup>56</sup>。なお、濁河の汚れもサソスセシの言霊の水火によりて清まりたれば、顕津男の神は清美河と言ふ名を与へ給ふ。

そもそも紫微の天界は、太陽の光強く明るきこと、現代我が地球の七倍にして、月

---

<sup>52</sup> 天之御中主大神にあたるようだ。軽く描かれているが記紀の原初の神と、「相共に神業のため進ませ給ひぬ」とある。

<sup>53</sup> 以上、第三七章。

<sup>54</sup> 説明書原文では、「真鶴新国」と「玉藻靈山」は、別節となっているが、天祥地瑞神系表では両項併せて玉野宮居（玉藻山）にまとめられているので、対応をとるために、神系表に従って一括した。「真鶴新国」と「玉藻靈山」の両項は天祥地瑞第七十四巻～第七五巻前半に当たっている。

<sup>55</sup> 以上、第七十四巻第一章。

<sup>56</sup> 以上、第三章。

の光またこれに準ずるといへども、妖邪の氣鬱積して、未だ全く神徳に潤はざる遼遠の国土は、やはり我が地球のごとく昼夜の区別生じ、夜は暗く、わづかに月星の薄雲を透して地上を照すのみなりしなり。ゆゑに顕津男の神、紫微天界を隈もなく明し清め、国土造り神生みせむと、百の艱みを忍びつつ四方を廻り給ふぞ畏けれ。

顕津男の神はひらりと駒に跨がり、遠く西南の天を仰ぎ見つ、『目路遠く真鶴山はかすみたり 万里行く駒に鞭うち進まむ』と、十柱の神を率ゐて鸞地に進ませ給ふ。近見男の神は自ら遠見男の神と名乗り、先頭に立ち、その日の黄昏るる頃、漸く真鶴山の麓まで進ませ給ひける<sup>57</sup>。

真鶴山は未だ地稚く柔く、あたかも搗きたての餅のごとく湯気濛々と立昇り、山の姿さへ未だ固まらず、茫然として夢幻のごとき丘陵なりける。しかして真鶴山の周囲には底深き沼広々と廻り、湯気立昇りある。

顕津男の神は生言霊に泥濁を固め狭霧を払ひ沼水を乾し、ウ声の言霊に生り出給ひし多々久美の神は生言霊に沼水を一滴の湿り無きまでに乾かせ、美波志比古の神の生言霊には沼底の地を白くなるまで乾いた。真鶴山を生みませる産玉の神は、先に国中比古の神を迎え、さらにいま顕津男の神を迎えて、先頭に立って真鶴山に登り給ふ<sup>58</sup>。

顕津男の神の生言霊に、真鶴山の稚国土は次第々々に盛れ上り、ふくれ上り、固まりつつ、真先に生ひ出でたるは、常磐樹の稚松、白梅の莖、筍等なりき。真鶴の山霊は瑞御霊の言霊に感じ、産玉の神の御歌に呼び覚まされて生代比女の神は生れましぬ<sup>59</sup>。

顕津男の神並びに百神たちは、真鶴山の頂に立ち生言霊をうち揃へ、東北東の空に向ひまし、七十五声の言霊を声も清しく宣り給へば、真鶴山は次第々々に真北の方に伸び広がりぬ。それより百神等は、北 北東 東北 東の方、東南 南東 南の方、南西 西南 西の方、西北 北西と、生言霊を七日七夜の間、倦まず怠らず力限り宣上げ給へば、真鶴山は四方八方に伸び広がり、膨れ上りて目路もとどかぬ許りとなりぬ。真鶴山の膨張によりて、東西南北万里の原野は次第々々に水去りて地固まりぬれ

<sup>57</sup> 以上、第四章。

<sup>58</sup> 以上、第五章。

<sup>59</sup> 以上、第六章。

ば、ここに目出度く真鶴国はうまらにつばらに生り出でにける。

生代比女の神は瑞御霊に恋着し給ひてついに玉野湖底に大蛇となりてひそみしが<sup>60</sup> 瑞御霊の厚き心に絆されて解脱し、龍頭の上に以前に勝る容貌美はしき女神と更正し給ひ、歡喜は凝りて体内に御子宿らせ給ひぬ<sup>61</sup>。

#### (4b) 玉藻靈山

顯津男の神は、一行の神々に送られて、玉野の森の<sup>すがど</sup>聖所に駒を進めた<sup>62</sup>。遠見男の神以下の神々は、主の神の御降臨と聞きて畏み、山の登り口に両掌合せて神言を奏上しながら、時の到るを待たせ給ひける<sup>63</sup>。

玉野比女の神は<sup>かみうみ</sup>神生の神業を勤むべく、主の神の御宣示をうけて、長き年月を待たせ給ひけるが、その適齡を過ぎ給ひたれば、<sup>ふさは</sup>神生みの神事に相応ず、再び主の神の御宣示により、層一層大なる<sup>くにう</sup>国土生みの神業を任せられ給ひたれば、玉野山の<sup>すがをか</sup>清丘に永久の住所を定め、時を待たせつつありける。

顯津男の神は漸くにして玉野森に着つかせ給たまふ。玉野比女の神は折から降臨し給ひし主の大神の御許を得て、丘の麓まで本津真言の神、待合比古の神の二神とともに出迎へ、待ち侘びたる瑞の御霊との初対面を悦び給ひつつ、聖所に導き給ひける<sup>64</sup>。

顯津男の神が玉野宮に詣でてまもなく、玉野宮に仕える本津真言の神が主の神天之<sup>ちからみちを</sup>峯火夫の神の化身なるを力充男の神の歌にて気付き<sup>65</sup>、この後、<sup>ちからみちを</sup>力充男の神の主神右守神高鉾の神の化身なるを知りぬ。

太元顯津男の神は、玉野比女の神、生代比女の神、待合比古の神、その他<sup>あまた</sup>数多の神々を従へて丘を下り、遠見男の神以下の神々を丘の上に導き給ひ、いよいよ国土生みの神業に従事し給ふこととはなりぬ<sup>66</sup>。

---

<sup>60</sup> 以上、第七章。

<sup>61</sup> 以上、第八～一七章

<sup>62</sup> 以上、第一八章。

<sup>63</sup> 以上、第一九、二〇章。

<sup>64</sup> 以上、第二一章。

<sup>65</sup> 以上、第二四章。

<sup>66</sup> 以上、第七四卷最終章（第二六章）。

顯津男の神は玉の泉の汀に立たせ給ひて、真鶴の国土をうまらにつばらに造り固めむと、七十五声の言霊を宣り上あ給へば、玉野丘は次第々々に際限もなく膨れ上がり、右に左に南に北に四方八方に膨脹して、真鶴山の頂上も真下に見るばかり高まり聳ゆるに至りぬ。この間殆んど七日七夜を費し給ひける。百神はおはしませども瑞の御霊のごとく澄み切り給はざれば、異口同音に言霊を奏上し給ふよしなく、まづ顯津男の神生言霊を宣らせ給ひ、つぎに真言蔽の神の清き言霊を奏上して、真鶴の国土を無限大に拓き膨らせ拡ごらせ給ひけるぞ畏けれ。その他の神々は各自一柱づつ言霊を宣りて神業を助け給たまひたるなりき<sup>67</sup>。

顯津男の神始め、玉野比女の神、生代比女の神、その他の神々は、玉野宮の大前に生言霊の祈願をこらし給へば、生代比女の神はここにいよいよ月足らひ日経ちて、玉の御子を安々と産み落し給ひける。この御子産の神業を助け奉りたるは、産玉の神にぞありける。生まれませる御子の御名を、千代鶴姫の命と称へ奉る。

圓屋比古の神は白駒の背に跨りて玉藻の山を下り、一目散に三笠山に帰り給ふ<sup>68</sup>。

顯津男の神は、玉藻山での神生み国生みの神業を了へて百神達に別れを告げ、生代比女の神、そして千代鶴姫の命の養育を國中比古の神に任せおきて、西の方にさして立ち出で給ふ。玉野姫の神は玉野大宮に親しく仕へ給ふぞ畏けれ。顯津男の神の祈りによりて主の大神の御言のまにまに、魂結の神、中津柱の神、天降り給ひて玉野比女の神の神業を補ひ給ひける<sup>69</sup>。

## (5) 万里ヶ丘 (万里の島)

### (5a) 西方の旅<sup>70</sup>

顯津男の神は、七日七夜の旅を重ねて、濁流滔々と漲る、幅広き水底深き日南河の南岸に着かせ給ひける。

顯津男の神は、宇礼志穂の神、魂機張の神、結比合の神、美味素の神の四柱の神に別れを告げ、言霊の力に水あせし河底を悠々として、またたく間に彼方の岸に上らせ

---

<sup>67</sup> 以上、第七五卷第三章。

<sup>68</sup> 以上、第九章。

<sup>69</sup> 以上、第一三、一五、一六章。

<sup>70</sup> 『天祥地瑞』では太元顯津男の神の御活動の記述はこの第七十五巻で終わる。

給ひければ、四柱神は安堵の胸を撫で下し、元来し道をたどりたどり、真鶴山、玉藻山の両聖地をさして急がせ給ひける<sup>71</sup>。

顕津男の神は、<sup>にしかた</sup>西方の<sup>くに</sup>国土を拓かむとして、まづ第一に悪神の化身なるスウヤトゴルを帰順せしめむと、<sup>ひなたがは</sup>日南河を北岸に打ち渡り給へば、ここに<sup>てるを</sup>照男の神は<sup>うちつ</sup>内津<sup>ゆたひ</sup>豊日の神、<sup>おほみちしりを</sup>大道知男の神、<sup>うしはぎ</sup>宇志波岐の神、<sup>うすつくりを</sup>臼造男の神、<sup>うちいるみ</sup>内容居の神、<sup>はつむすび</sup>初産霊の神、<sup>なるみを</sup>愛見男の神の七柱を従へて出で迎へ給ふ<sup>72</sup>。次に、<sup>みはしひこ</sup>美波志比古の神が現れ給ふが、曲津見の神の謀計の罠に陥るなどの禍もありぬ<sup>73</sup>。そののち、神は各自禊終り、その<sup>いさを</sup>功を<sup>ほめそや</sup>讚美しながら、<sup>みあと</sup>顕津男の神の御後に従ひ、<sup>かしはぎ</sup>柏木の森を目当に、スウヤトゴルの曲津見を征服すべく、<sup>くつわ</sup>意気揚々と<sup>くつわ</sup>轡を並べて立ち出で給ふ<sup>74</sup>。

スウヤトゴルに姿を変じて、西方の国土の天地を吾物とし、邪気に包み居たる大曲津見は、<sup>たかちほ</sup>高地秀の宮より降らせ給ふ<sup>あさか</sup>朝香比女の神を、自ら顕津男の神と称し迎へ<sup>まつ</sup>奉りて、御子生みを為し、西方の国土を完全に占領せむものと、計画をさをさ怠らざりし処へ、真正の太元顕津男の神の間近に來り給ひしに驚き、途中にて瑞の御靈一行を全滅せしめむと、部下の邪神たちを集めて種々評議の結果、<sup>しごぎつね</sup>醜狐を柏木の森に遣はし、種々の謀計を与へてこれに当らしめける。

とはいへ、瑞の御靈はその謀計を見破り給ひ、神々は各自生言霊の御歌うたひとつ、曲神の棲めるてふ、柏木の森を何の艱みもなく突破し、スウヤトゴル山脈さして、駒の轡を並べ悠然として進み給ふぞ畏き極なりけり<sup>75</sup>。

## (5b) 高千秀の宮司

紫微天界における神政樹立の根元地なる<sup>たかちほ</sup>高地秀の山の山麓に、宮柱太敷立て高天原に千木高知りて、四方に輝きたまふ高地秀の宮一名<sup>ひがし</sup>東の宮を後にして、思し召す

<sup>71</sup> 以上、第一九章。

<sup>72</sup> 以上、第二〇章。

<sup>73</sup> 以上、第二一章。

<sup>74</sup> 以上、第二二章。

<sup>75</sup> 以上、第二三章。

ことありとて、太元顯津男の神は、八柱の御樋代神を後に残し、供神をも連れ給はず立出で給ひければ、ここに八柱の御樋代神は天津高宮に詣で給ひて、主の大神の神宣を乞ひ給ひ、宮の司たるべき神を降し給へと祈らせ給へば、主の大神は、その願事<sup>ねぎごと</sup>を諾ひ給ひて、ここに銳敏鳴出<sup>うなりづ</sup>の神、天津女雄<sup>あまつめを</sup>の神の二柱を降し給ひて<sup>76</sup>、朝な夕なの宮仕へを言依さし給ひしこそ畏けれ<sup>77</sup>。

八十曲津見の神は、高野比女の神一行が行手を妨げむとして、底ひも知しれぬ深溪川と身を変じさやり、高野比女の神の炯眼に看破され、銳敏鳴出の神の生言靈に打たれて、たちまち煙散霧消の体となりたれども<sup>78</sup>、再び陣容を立て直し、蜿蜒<sup>えんえん</sup>数百里にまたがる巖骨<sup>いわほね</sup>の山を築き上げ、その前面に千尋の深き溪川をつくりて、一步も進めましめざらむと力を尽くしけり。高野比女の神一行は、夜を日についで進ませ給ふ折しもあれ、前途に横たはる思ひがけなき巖山に行手を遮ぎられしが、銳敏鳴出の神は、かたへの千引巖を頭上高くさし上げながら、「うん」と一声、深溪川の巖ヶ根に向つて打ちつけ給へば、巖と巖とは相摩して、迸<sup>ほとば</sup>しり出でたる火の光に、曲津神は驚きて、堅き巖山もどよめきそめつ後方に退き、つひには白雲となりて、御空遠く消え失せたり。紫微天界における火の生まれ出でしは、銳敏鳴出の神の巖投げによりて始まれるなり<sup>79</sup>。

春の陽気は漂ひて、桜花爛漫と咲き乱れたる真昼頃、高地秀の宮居に帰り給ひければ、胎別男<sup>みわけを</sup>の神は比女神の姿を見るより打喜び、歓迎の馳走の準備に忠実々々しく立ち働き給ひける。ここに高野比女の神一行は、大宮居の大前に禊祓ひを終り、感謝の祭典を行ひ給ふ<sup>80</sup>。

### (5c) 朝香比女の神

朝香比女<sup>あさかひめ</sup>の神は、顯津男の神を慕はせ給ふ心の駒の狂ひたちて足搔き止まねば、御

---

<sup>76</sup> 神系図では、八柱の女神の上位に、宮司として二柱の神が記されているが、これは太元顯津男の神の代理という視点を反映したものであろう。

<sup>77</sup> 以上、第七六巻、第一章。

<sup>78</sup> 以上、第三章。

<sup>79</sup> 以上、第四章。

<sup>80</sup> 以上、第六章。

樋代神たち、宮司神たちの心を籠め力を尽しての諫めも、空吹く風と聞き流し、白馬<sup>しらこま</sup>に鞭うち、黄昏の空を東南指して駆け出で給ふぞ雄々しけれ。後<sup>あと</sup>に残れる御樋代神たちは慨然として歎かせ給ひつつ、高地秀の宮居の聖殿に、朝香比女の神の旅の無事を祈らせ給ふ<sup>81</sup>。朝香比女の神は途中<sup>さぬ</sup>狭葦の河瀬にさえぎる曲津神を燧石の真火の光に退け東南さして大野原を進み給ふ<sup>82</sup>。

遥の空にぼんやりと霞む<sup>さかき</sup>栄城の山を目当に、その日の黄昏れる頃、朝香比女の神は安々と着かせ給ひける。栄城山の神々は御樋代神が出でますと、雁がねの便りに聞き知りまして、山麓<sup>よこた</sup>に横はる細溪川の岸边まで出迎へ給ふ。その神の御名は機造男<sup>はたつくりを</sup>の神、散花男<sup>ちるはなを</sup>の神、中割男<sup>なかさきを</sup>の神、小夜更<sup>さよふけ</sup>の神、親幸男<sup>ちかさちを</sup>の神の五柱にして、いづれもウ声の言霊より生り出で給ひし神々におはせり<sup>83</sup>。朝香比女の神は栄城の山の<sup>すがど</sup>聖所にしばし時をうつし給ひ、神々に別れを告げ、靄立ち籠むる朝明<sup>あさあけ</sup>の大野ヶ原を、進ませ給たまふ<sup>84</sup>。

八十曲津見<sup>やそまがつみ</sup>は朝香比女の神の行手を遮らむとして、広大なる真賀の沼と体を変じ、女神を悩まし奉らむとして待ち構へ居たりしが、女神の生言霊に固められて、たちまち真の沼となり、永久に大野ヶ原の<sup>まんなか</sup>真中に横はる事となりける。また巨巖は八十曲津見の本体なりけるを、言霊の幸はひによりて水上に浮かぶ磐楠舟<sup>いはくすぶね</sup>となり、比女神を彼岸に渡す御用に<sup>さかしま</sup>逆に使はれ、再び汀辺に万世不動の御舟巖<sup>みふねいは</sup>と固められければ、八十曲津見はいかんとも詮すべなく、その率ゐたる百の曲津見は、いづれも沼底の貝<sup>かひ</sup>と変じて、わづかに生命を保つ事を許されにける。

朝香比女の神は沼を渡りて東南方の野辺をさして進み給へば、<sup>ほどちか</sup>程近き野辺の真中にあまり高からぬ丘陵ありて、<sup>くにつかみ</sup>国津神たちの<sup>すみか</sup>住家幾十となく建ち並び居たりければ、朝香比女の神は国津神の住へる村を訪はむとして進ませ給ふ。国津神の長たる<sup>さぬ</sup>狭野比古に控えの燧石を与へ、火で、魚介を焼き土器を造り白湯<sup>さゆ</sup>を飲むなどの火食の道を教へ、

---

<sup>81</sup> 以上、第八章。

<sup>82</sup> 以上、第九章。

<sup>83</sup> 以上、第一〇章。

<sup>84</sup> 以上、第一三章。



さらには清<sup>すが</sup>しき宮居<sup>みや</sup>を造り主の神の神霊を祀らしめ給ふ。そして、狭野比古の望みを容れて狭野比古とともに駒を並べて勇ましく進ませたまひける<sup>85</sup>。

高地秀山の峰より落つる東河<sup>あづまがは</sup>の岸边より、無数の大蛇<sup>おろち</sup>となりて比女神待ち居たり。東河の激流折から輝く新月の光に照らされて浪頭は大蛇の鱗によってキララキララと光り輝やき渡る。四方八方より、ウーウーウーと言霊響き渡り、幾千万の大蛇は次第に消えうせて、大河は青みだちたる水滔々と月に照らされ深く広く流れゐる。主の神の神言畏<sup>みをさき</sup>み御尾前<sup>うなりづ</sup>をかくれて守る鋭敏鳴出の神の言霊の力なり。

朝香比女の神の『タトツテチ、八ホフヘヒ』の言霊に、不思議や比女と狭野彦の駒に大いなる翼が生へ空中に搏ちながら、見も届かぬ広河の激流の向かつ岸边に難なく着かせ給ふ。狭野彦は朝香比女の神の神徳を讚美しながら、果てしなく霞立ち籠むる<sup>わかぐにはら</sup>稚国原を進み行く<sup>86</sup>。

漸<sup>やうや</sup>くにして比女神は、非時深霧<sup>ときじく</sup>の籠むる八十曲津見の永久<sup>すみか</sup>の棲処なる、霧の海の岸边に着かせ給ふ。主の大神<sup>おほみこと</sup>の大神言もて、比女神の征途を守り補<sup>たす</sup>くべく待ち構へ居たる五柱<sup>いつはしら</sup>の神々の御名は初頭比古<sup>うぶがみ</sup>の神、起立比古<sup>おきたつ</sup>の神、立世比女<sup>たつよ</sup>の神、天中比古<sup>あめなか</sup>の神、天晴比女<sup>あめはれ</sup>の神にましましける。天津神六柱<sup>むはしら</sup>と一柱の国津神は、霧の海の岸边に生言霊を各自に奏上し給へば、たちまち四辺<sup>あたり</sup>の巖は大いなる御舟<sup>みふね</sup>となりて、岸边に軽く浮かびける。ここに神々は駒諸共にこの御舟に乗り移りて一夜を明し給ひける<sup>87</sup>。

数十里の波を渡りて御舟は魔の島近く着きにける。この魔の島は八十曲津見の地中に潜み、ただ頭のみを水上に浮かせゐたるものにして、数多<sup>あまた</sup>の蟻はいづれも曲津見の頭にわける虱<sup>しらみ</sup>なりける。朝香比女の神の言霊に、八十曲津見の巨体はそのまま海中<sup>わだなか</sup>に巨大なる巖島<sup>いはしま</sup>と固められける。この島は周囲百里に余る相当に広き島なりける。ここに天中比古の神は国津神狭野彦を譲り受け、諸々の草木五穀を生言霊に生み出でましつ、つひに狭野<sup>をすくに</sup>の食国を生み出で給ひ、永久に鎮まり給ひける<sup>88</sup>。

朝香比女の神は曲神の島を言向けて狭野の神国を拓きつつ、天中比古神と狭野彦を

<sup>85</sup> 以上、第七六巻第最終章（第一五章）。

<sup>86</sup> 以上、第七七巻第一章。

<sup>87</sup> 以上、第二章。

<sup>88</sup> 以上、第三章。

後に残して、四柱神を伴ひ海原の浪おしわけて進む。仰ぎ見れば遠の海原にかすみたる万里の島の白馬ヶ岳の見ゆる折しも、大海原の浪は刻々に高まり来たり、ほとんど御舟を呑まむとす。御舟は荒浪の間を木の葉の如く翻弄されつつ海中に漂ふ。朝香比女の神の歌ひ給ふや、伊<sup>いたけ</sup>猛り狂ひし浪は吹く風にも何のさはりなく、たちまち鋸の歯の如き嶮峻なる巖山となり、泡立つ小波<sup>さざなみ</sup>は真砂<sup>まさご</sup>となりて、一つの生島<sup>いくしま</sup>は生まれけるに言<sup>いくしま</sup>霊生島と名付けたまふ。朝香比女の神は、あはせて、この功が鋭敏鳴出の神の御水火に守られてなりしことを明かされ給ふ。舟は遥かの空に霞む白馬ヶ岳の方面さして進みたり<sup>89</sup>。

やうやくにして白馬ヶ岳の麓に御舟は着きにけり。この島は万里<sup>まで</sup>の島と称へ、この海原に浮かべる島々の中に、もつとも広くして地肥えたる貴の島ヶ根なりける。万里の島には幾千万ともなき野馬<sup>やば</sup>と羊棲息し、いまだ一柱の国津神も住みたることなき田族<sup>たから</sup>の島にぞありける。

いづこよりか、御樋代神田族<sup>たから</sup>比女の神の神言<sup>みこと</sup>をかしこみて、輪守比古<sup>わもり</sup>の神、若春比古<sup>わかはる</sup>の神の二柱は白駒に跨がり、田族<sup>たから</sup>比女の神の館<sup>あない</sup>に案内すべく進み来たる。朝香比女の神ほか四柱の神は駒に跨がり、月照る夜半の野路に轡<sup>くつわ</sup>を揃へて進ませ給ふ<sup>90</sup>。

#### (5d) 万里の神国<sup>91</sup>

天津高宮<sup>たかみや</sup>に鎮まりいます主の大神は、七十五声<sup>しちじふごせい</sup>の言霊を間断なく鳴り出で給ひて、泥海の世界を固むべく、まづ初めに当たりて、筑紫ヶ岳、高地秀の峰、高照山の三大高山を生み給ひてのち万里<sup>まで</sup>の海に無数の島々をなり出で給ひて、すべての生物<sup>いきもの</sup>を生ませ養ひ給ふべく経綸されたり。その最初に当たりて万里の海<sup>はうり</sup>の中心なる万里の島を生り出で給ひぬ。この島は面積約八千方里<sup>92</sup>にして、西に白馬ヶ岳あり、東に牛頭ヶ峰<sup>ごつがみね</sup>

<sup>89</sup> 以上、第五章。

<sup>90</sup> 以上、第六章。

<sup>91</sup> 木庭次守の節の名称は、「万里の島ヶ根」であったが、上記節名がより妥当と考えた。霊界物語資料篇（1971年刊行）p. 379 (11)からも、木庭次守はそう認識していると思われる。

<sup>92</sup> メートル条約加入後の1891年に制定した度量衡法では、1里=36町=12960尺=3.927kmを採用すると $(8000 \times 3.927)^2 = 986,965,056 \text{ km}^2$ となり、地球の表面積は510,100,000  $\text{km}^2$ だ

あり、その中心を流るる清川せいせんを万里までの河と言ふ。

主の大神は、いかにもしてこの美はしき万里の島を永久の樂園とこしへに定めむと思召し、八十柱の御樋代神の中にて最も神力強き田族比女の神に、ウの言靈より生れ出でし若春比古わかばるの神、エ声の言靈より生り出でし保宗比古もちむねの神、オ声の言靈より生り出でし直道比古なほみちの神、ヤ声の言靈より生り出でし山跡比女やまとの神、ヨ声の言靈より生り出でし千貝比女ちかひの神、ユ声の言靈より生り出でし湯結比女ゆむすびの神、マ声の言靈より生り出でし正道比古まさみちの神、ワ声の言靈より生り出でし輪守比古わもりの神、ヅ声の言靈より生り出でし雲川比古くもかはの神、ヲ声の言靈より生り出でし靈山比古たまやまの神の十柱神を従がへて、万里の島を守るべく下したまひける<sup>93</sup>。

主の大神の清澄無垢にして、至粹至純なる言靈の水い火まより生り出でたる万里の島ヶ根もつひには邪神邪氣発生して、日月星辰の光を遮り、万物の發育を妨げ、神人禽獸等の生命を脅かしかつ短縮せしめて能事のうじおは了れりとなし、到底善言美詞の言靈をもつて完全に済度し得べからざる難物なり。ゆゑに未だ地つち稚わかく国くに土定まらざりし紫微天界の頭初に当たりては、生言靈の武器をもつて言向け和すこと容易ならざれば、神々は数億万年後の世界のために、あらゆる悪神邪氣の靈を根本的に絶滅せしめむと千辛万苦に堪へ、全能力を傾注し、活動し給ひたるなり。

じつに吾人<sup>94</sup>がこの清明なる天地に安らかに生を保ち得るも、四季の順序調へるこれの地上にもろもろの山水の明媚なる風光を觀賞し、生命の日月を拝し得るも、皆太初の神々たちの舍身的御活動の賜にして、その厚恩は海よりも深くまたスメールの山よりも高く、たうてい吾人の言語をもつて言ひ現はし称へ了ることは不可能と知るべし。主の大神の直系にしてかつ太初に特に全力を注ぎて修理固成したまへる紫微天界の終結たる我が地球、とくに豊葦原の中津神国に尊嚴無比にして、その皇統は主の大神より流れ出で、永遠無窮に森羅万象に対し無限の恩恵を賜ふことを知るべし。

万里の島の御樋代神として天降り給ひし田族比女の神は、あらむ限りの神力と神策

---

から、およそ地球の表面積の2倍にあたっている。

<sup>93</sup> 以上、第七章。

<sup>94</sup> ごじん、と読んで、われわれ、を意味する。明治大正時代の小説では、一人称複数が一般のように感じている。

を發揮はし給ひけれども、いまだ白馬ヶ岳の南側にあたる万谷千谷の奥処<sup>おくど</sup>には曲神の邪氣凝り固まりて、ときどき雲霧を起こし、万里ヶ島の天地を咫尺弁ぜざるまでに包みて、止むを得ず大勇猛心を發揮し、白馬ヶ岳の悪魔を徹底的に掃蕩せむと思召し、十柱の従神<sup>そへがみ</sup>を従がへ、千里の荒野を駒の背に踏み破りつつ、辛うじて楠の大木の生ひ繁りたる目路<sup>めぢ</sup>も届かぬ泉の森の聖所につかせ給ふ。魔樓ヶ谷<sup>ますみ やつ</sup>の悪霊を掃蕩すべく、部署を定めて出で立たせ給ひ、御身自らは泉の森を本営と定め、輪守比古<sup>わもり</sup>の神、若春比古<sup>わかはる</sup>の神を御側に守らせおき、靈山比古<sup>たまやま</sup>の神、保宗比古<sup>もちむね</sup>の神、直道比古の神、正道比古の神、雲川比古の神、山跡比女の神、千貝比女の神、湯結比女の神の五男神三女神をして先陣を勤めしめ給ひける<sup>95</sup>。

白馬ヶ岳魔樓ヶ谷<sup>ますみ</sup>に出陣せし五男神三女神の活躍と、泉の森での御樋代神、輪守比古、若春比古の三神の西南の空に向つて間断なく宣り上げ給ふ生言靈の功により悪魔は根底から掃蕩し得たり<sup>96</sup>。

万里ヶ丘の聖所に凱旋したる十一柱の神々は、喜びのあまり祝宴を開くべく万里の国原の生きとし生けるものの悉くに、駿馬使ひを遣はし給ひければ、定めの日に来たるを待ちつつ八千方里の国土に、生きとし生けるもの等悉く先を争ひ雲霞のごとく集り来たりて、異口同音に凱旋を寿ぎ歌ふ声は天地も崩るるばかりなりけり。幾千万の馬も牛も羊も鼠蛙も、先を争ひ万里ヶ丘の聖所を十重二十重にとり巻き、立錐の余地なきことこそ前代未聞の大慶事なりける<sup>97</sup>。

万里ヶ島の天地を塞ぎたる邪神の潜し雲霧はくまなく晴れて、日月は清く光を地上に投げ万物蘇生の思ひして、ここに新らしく国名を万里の神国と称へ、総ての基礎を万世に固め給ふ。かかる処に朝香比女の神は天降り給ひ、田族比女の神に燧石を国宝として賜ひ、以前の四柱の神を従へまして諸神に別れを告げ、御来矢<sup>みくりや</sup>の浜辺より磐楠舟<sup>いはくすぶね</sup>に乗り万里の海原を東南の空さして静かに静かに進ませ給ひける<sup>98</sup>。

万里の大海原に浮かびたる万里の島ヶ根は、その面積約八千方里にして、豊葦原の瑞穂の国の発祥地なりければ、土地ことに肥え、春夏秋冬の四季の順序正しく、万物

---

<sup>95</sup> 以上、第一三章。

<sup>96</sup> 以上、第一四～二〇章。

<sup>97</sup> 以上、第二一～二三章。

<sup>98</sup> 以上、第二四章。

の発育また極めて良好なりければ、味よき果物や美しき花に害虫の好んで簇生するがごとく、八十曲津見は千代の棲処と此処に暴威を振り居たりけるが、八十柱の御樋代神の一柱とまします田族比女の神は、主の大神の神宣を畏み給ひ、十柱の女男の神将を率ゐてこの島ヶ根に降臨し、生言霊の剣を抜き持ちて、荒ぶる神等を山の尾ごとに追伏せ河の瀬ごとに追攘ひて打ち譴責め給ひ、心安く心楽しき神国と定め給ひける。折しもあれ高地秀の宮居に親しく仕へ給ひし八柱御樋代神の中にてももつとも美はしくもつとも面勝神と射向かふ神なる朝香比女の神が、女男四柱の神を従がへ、しばしこの土に御跡をとどめ給ひしより俄かに国形新たまり、その威光を日に月に加へ給ひけるこそ目出度けれ。加ふるに曲神の最も忌み恐るる真火を切り出づるべき燧石を、この国土の御宝として朝香比女の神御手づから授け給ひしより、日に国土治まり、総ての国津神たちはその恩恵に浴し、火食の道を盛んに行なひにける。主の大神の生み給ひし八十国八十島の中にて、最も早く火食の道を始めたるは狭野の里なれども、国内一般に火食の道を開きたるは、この万里の島をもつて濫觴となす。ゆゑに一名火の国とも称へける。

これより程経て朝香比女の神の勧めにより、太元顕津男の神は西方の国土を治め、朝香比女の神に国魂神の養育を任せおき、照男の神をして西方の国土を守まもらしめ置き、潮の八百路を渡りて万里ヶ島に天降給ひ、ここに田族比女の神に御水火を合はせ給ひ、<sup>ひだりみぎり</sup>左<sup>みぎ</sup>右<sup>みぎ</sup>の大神業を終へて国魂神を生ませ給ひ、<sup>くに</sup>国土の基礎定まるを見すまして再び高照山北面の稚国原を修理固成すべく進ませ給ひしなり<sup>99</sup>。

## (6) 常磐ヶ丘の宮 (葦原新国)

### (6a) 葦原の国

朝香比女の神の乗らせ給へる磐楠舟は、大小の島々を右に左に縫ひながら日の黄昏る頃、曲神の集まると聞えたるグロスの島に近寄り給ふ。このグロスの島には、グロノス、ゴロスといふ猛悪なる大蛇<sup>をろち</sup>の神棲息して、数多の醜神を使役し、隙あらば総ての島々を侵さむとしつつ待ちかまへ居たる<sup>100</sup>。

真鶴の声、<sup>かささぎ</sup>鶺鴒<sup>かささぎ</sup>の声、冴えに冴えつつ、朝香比女の神の一行を迎へまつるもののご

<sup>99</sup> 以上、第七八巻、第一章。

<sup>100</sup> 以上、第三章。

とし。朝香比女の神は御舟を千引巖の碁列せる浜辺に静々と寄せ給ひ、駒諸共に御舟を出でて陸地くがちに一行出でさせ給ひ、初頭比古うぶがみの神は、朝香比女の神の御手よりうやうやしく燧石を受取り、神言かみごとを奏上しつつカチリカチリと打ち出で給へば、真火まひは辺りに飛散したちまち幾年いくとせともなく積もれる萱草に移りける。幾千里に亘る大原野は、見る見る黒焦げとなりて彼方此方に竜神、大蛇、猛獸等の焼け亡びたる姿、天日に曝さらされ、無残の光景をとどめけるにぞ、御樋代神は四柱の神に命じて各自その遺骸を土中に埋めさせ給ひつつ、数多の月日を費やし給ひけるぞ畏けれ<sup>101</sup>。

朝香比女の神の一行は、このグロスの島に降り給へる御樋代神葦原比女の神を訪ふべく、焼野ヶ原を馬背に跨がり進ませ給ふ折、常磐樹の松数千本、野火ほのほの焰まぬがに免れ青々と茂る小さき丘あり。ここに一行は疲れを休めむと国見くにみし給たまひける折しも、いづくともなく悲しき声つぎつぎに聞こえ来たるにぞ、朝香比女の神は怪しみに堪へず、御歌詠ませ給ふ。ここに安き生活を送り来たりし数十柱の国津神の男女はつぎつぎに神言みことの前に集まり来たり、恭敬礼拝久しうす。朝香比女の神は、国津神野槌彦ぬづちひこの火傷せし老母に天の数歌を宣り給たまひつつ伊吹き給へば、瞬間またたくちに若き女のごとく生おひ立ちにける。

朝香比女の神は『曲津見の禍いかに強くとも天の数歌宣りて祓へよ。一二三四五六七八九十百千万ことたまのと言霊宣らさへ』と教へ、野槌彦は『有難し天津御神の神宣、国津神等に伝えて生きむ。今日よりは昔の手振り改ためて主の大神を斎きまつらむ』と応えし<sup>102</sup>。

ここに朝香比女の神は忍ヶ丘最高所のあくしや幄舎を大本營と定め、野槌彦を傍に侍らせ觀戰場と定め給ひ、新進氣鋭の英雄神初頭比古の神、起立比古の神、立世比女の神、天晴比女あめはれの神の四柱をして、沼の大蛇の征服に向はしめ給ふ。この沼の名はグロス沼と古来称へられ、グロノス、ゴロスの根拠地なりける<sup>103</sup>。

四柱の神々は、東西十里南北二十里に余るグロスの沼の東西南北に一柱づつ陣どり天津祝詞を奏上し、七十五声かつ天の数歌を宣りあげし。大蛇の脆くも逃げ失せ

<sup>101</sup> 以上、第四章。

<sup>102</sup> 以上、第五章。

<sup>103</sup> 以上、第七章。

たるは、朝香比女の神を蔭ながら守らせたまふ鋭敏鳴出の神のウ声の力なりける<sup>104</sup>。

朝香比女の神は四柱の従神とともに、国津神野槌彦を案内役とし、大蛇の再び鷹巢たかしの山の根にさやらむとして移るを察し、中野の大河を打ち渡り、鷹巢の山の麓なる葦原あしはら比女の神います聖所をさして進み給ふ<sup>105</sup>。

初頭比古の神の言霊に、中野の河底は地底よりふくれ上がり、少しの高低もなき平面地となり、ここに、朝香比女の神の一行は、この陸地を駒並めて渡り給はむとする折しもあれ、朝香比女の神一行を迎へ奉るべく鷹巢みやの宮居を立ち出で、ここにやうやう着かせ給ひたる八十比女神の一柱なる葦原比女の神、真以まさもち比古の神、成山なりやま比古の神、栄春さかはる比女の神、八栄やさか比女の神、靈生たまなり比古の神の三男三女の天津神と出会い給ふ<sup>106</sup>。神々は馬上にて日長の退屈さに交々御歌詠ませつつ、漸くにして桜ヶ丘の聖所に着きたまふ<sup>107</sup>。

大蛇の鷹巢山の谷間深く忍び入りし一時は平穩無事なりしが、時ありて黒雲を起こし天日を覆ひ、寒冷の気を四方に散布しければ、万物の発生に大害を及ぼし、再び元のグロスの島に帰らむとしたるを、この度は葦原比女の神も朝香比女の神の賜ひし燧石の真火の功によりて、諸神等を率ゐ邪神の潜む山野を焼き払ひ給ひければ、つひには葦原の国土をふり捨てて悪魔は遠くにしかた西方の国土くにに逃げ去りにける<sup>108</sup>。

葦原比女の神の一行は、朝香比女の神の一行送りまゐらせつつ、忍ヶ丘の山麓に春の永日は黄昏れける。天の一方を眺むれば、一塊の雲片もなき紺青の空に、上弦の月は下界を照らし給ひ、月舟つきふねの右下方に金星附着して燦爛と輝き渡り、月舟の右上方三寸ばかりの処に土星の光薄く光れるを打ち眺めつつ、三千年に一度来たる天の奇現象にして稀有の事なりと、神々は各自御空を仰ぎ、葦原の国土の改革すべき時の到れるを感知し給ひ、葦原比女の神は朝香比女の神にはかりて、国津神を天津神に天津神を国津神となしぬ。朝香比女の神の御歌は次のよう。『天津神の言霊濁

---

<sup>104</sup> 以上、第八章。

<sup>105</sup> 以上、第九章。

<sup>106</sup> 以上、第一〇章。

<sup>107</sup> 以上、第一三章。

<sup>108</sup> 以上、第一五章。

り水火濁り、光の褪せし土星なりけり。国津神の中より光り現はれて、世を守るてふ金星の光よ。月舟の清き光は葦原比女の神の御魂の光。ここにまず天津神等心せよ、朝な夕なに神を斎きて神を認めず、国津神は真言の神を斎きまつれる。神を背にし信仰の道欠くならば神魂の光り次次に失せむ』

朝香比女の神はまたもや御歌詠ませ給ふ。『天の時地の時到りて葦原の国土の光は現はれにけり、葦原の国土の標章と今日よりは、<sup>ス</sup>の玉の旗を翻しませ。○の玉を並べ足らはし十と為し、真言の国土の標章と定めよ』<sup>109</sup>

ここに葦原の国土の守り神と生まれませる葦原比女の神は、天体に現はれし月星の奇現象に三千年の天地の時到れることを証覚し給ひ、大勇猛心を發揮して、天津神等を一柱も残さず地に降し、また地に潜みたる神魂の清き国津神を抜擢して、天津神の位置につらね、国土の政治一切を統括せしめ給ふ大英断に、朝香比女の神は感激し給ひ、諸神に向かつて宣示し給ふ。朝香比女の神一行の神々の立会いのもとに、葦原比女の神の英断的の神任式は無事終了をつげ、天津神は国津神となり、国津神は天津神と任せられて、いよいよ葦原の国土の新生命は輝き初めにけるぞ畏けれ<sup>110</sup>。

妖邪の気鬱積して黒雲天地を塞ぎ、ほとんど亡国に瀕したるグロスの島は、天の時到りて、八柱御樋代神の一柱なる朝香比女の神の御降臨によりて、天地清まり、国内一点の風塵も止めざるに至りたれば、ここにグロスの島国を葦原新国と改称し、国津神を抜擢して葦原比女の神の国津柱の御側近く神業を司らしめ給ふ事とはなりぬ。国土の中心なる忍ヶ丘に宮居を移し給ひ、八尋殿を急ぎ見建て給ひて、国津神の上に臨ませ給ふ事とはなりぬ。

## (6b) 建国祭の祭典

葦原比女の神は新たに言依さし給へる天津神等を率ゐて、忍ヶ丘に宮柱太しき立て主の大神を斎き祭り給ひ、大御前に潔斎して国の初めの神嘉言を奏し給ひ、その

---

<sup>109</sup> 以上、第一六章。

<sup>110</sup> 以上、第一七章。



後、朝香比女の神は寿ぎの御歌詠ませ給ふ。かく歌はせ給ふ折しも、主の大神の御使神なる鋭敏鳴出の神は天津御空より十曜の神旗を振翳し、数多の従神をしたがへて紫の雲に乗りこの場に天降り給ひ、<sup>うやうや</sup> 恭しく拍手しながら宣示し給ふ。

『掛巻くもこれの新宮におはします主の大神にのりごと申さむ。久方の雲路をわけて神<sup>みことのり</sup>宣畏み吾はここに来つるも、願はくは千代に八千代に葦原の国土を守りて栄えあらせよ。朝香比女神の出立ち守らひつ、目出度く今日を現はれにける葦原比女神の神言に新らしき国土の生まれをことほぎまつるも、地稚く国土稚けれど鋭敏鳴出の神は<sup>ときじく</sup>非時守りまつらむ。心安くこの稚国土を開きませ、吾は力を添へて守らむ』

111

ここに鋭敏鳴出の神は<sup>けんこくさい</sup>建国祭の祭典を終はりたるより、再び光となりて数多の従神を伴なひ、紫の雲に乗りて宇宙をウーウーと生言霊も爽かに響かせながら天の一方に御姿を隠し給ひける<sup>112</sup>。

朝香比女の神一行をはじめ、見送りまつりし葦原比女の神の主従は、やうやくにしてその日の黄昏る頃、常磐の海辺に近き松と楠との天を封じてそそりたつ常磐の森に着かせ給ふ。御空の月は皎々として冴え渡り、彼方此方の樹立まばらなる<sup>すがには</sup>清庭に、白金の光を投げさせ給ひ、<sup>げ</sup>実に平和の光景は天地に漲り渡れり<sup>113</sup>。

## (7) 土阿の宮 (葦原の国)

### (7a) 怪体の島

朝香比女の神の一行は、朝日の照らふ万里の海原を順風に乗じ、南へ南へと舟を進ませ給ふ折しもあれ、鷹巢の山の頂より、黒煙濛々と噴火のごとくに噴き出してグロノス、ゴロスの竜蛇神の形を現はし押し寄せ来たる。闇の海の暴風怒濤に舟を翻弄されながら、朝香比女一行の神々は<sup>しんしよくじやく</sup>神色自若として各自御歌詠ませ給ふ。かかる処へ百雷の一時に轟くごときウーウーの唸り声響き渡り、たちまちにして荒

<sup>111</sup> 以上、第一八章。

<sup>112</sup> 以上、第一九章。

<sup>113</sup> 以上、第二〇章。

風は鋒先を緩め、浪和らぎ渡りたり。舟は漸くにして巨大なる巖島に近づきぬ。赤黒さまざまの大蛇幾筋となく大口を開き火焰の舌を吐き、襲はむとすれど、朝香比女の神の御歌に、高く屹立したる周囲約三里の巖島は火焰に包まれ、海水は熱湯のごとく煮えくり返かへり、大蛇は焼かれ傷つき命からがら、鷹巢<sup>たかし</sup>の山を指して逃げ行きにける。各自も御歌詠ませつつ、順風に乗り舟の舳を東南に向け進ませ給ふ<sup>114</sup>。

朝香比女の神の一行はグロノス、ゴロスの化身なりし巖島の邪神を生言霊の光に島もろとも焼き尽くし給ひ、舳を東南に向け悠々進ませ給ひける。朝香比女の神は『浪の秀を渡り聞こゆる声は悲し、国津神等の叫びなるらむ、声すなる島に向ひて吾は進まむ』と歌はせ給ふや、御舟は舳を東北に変じ、波上に霞める島影さして進み行ゆく。かかる折しも、浮島の方面より荒浪を押しわけながら大悪竜、幾千丈とも限りなく、浪飛沫<sup>なみしぶき</sup>を立て、こなたに向つて凄まじき勢にて進み来たるあり。朝香比女の神はこの光景を打ち見やり給ひつつ、『グロノスにあらざゴロスにあらざして、まさしく八岐の大蛇なりける。舟よ舟よ広くなれなれ大きくなれよ 八岐大蛇の数百倍となれ』と歌はせ給ふや、磐楠舟は膨れ拡がり、堅きこと岩のごとく、たちまちその形山<sup>やま</sup>のごとくなりぬ。

大蛇は御舟間近く進み来たり余りの大船に驚きにけむ、さも無念さうな面持にて、ざんぶとばかり水中に怪しき姿をかくしける。朝香比女の神は、臍下丹田<sup>たま</sup>に魂を鎮め、天に向つて合掌し、天津祝詞を奏上し、生言霊を宣らせ給へば、海水はたちまち熱湯のごとく煮え返り、八岐大蛇は全身糜爛<sup>ただ</sup>れ藻搔き苦しみ、つひには死体となりて赤き腹部を現はし、水面に浮かび出でたり。朝香比女の神は『曲津見の醜の大蛇は亡びたり、歎きの島は蘇<sup>よみがへ</sup>るべし。吾舟は歎きの島に急ぎ進めよ』と御歌詠よませ給たまふや、御舟は一瀉千里の勢ひをもつて黄昏れ近き海原を進み行く<sup>115</sup>。

歎きの島に上がりて見れば、黒煙濛々<sup>もうもう</sup>と立ち籠めて咫尺<sup>しせき</sup>を弁ぜず、黄昏とはいひながら、御空の月は影を隠し、草木のかげさへも目に入らぬばかりなり。ここに朝香比女の神は、上陸早々天津神言<sup>かみごと</sup>を奏上し、七十五声の生言霊をなり出で給へば、

<sup>114</sup> 以上、第二章。

<sup>115</sup> 以上、第二章。

月読の神は明皎<sup>めいくわうくわう</sup>々の光を地上に投げ給ひける<sup>116</sup>。この島の国津神の島彦島姫が朝香比女の神の御前に、『公の天降り<sup>あまのふり</sup>を歡ぎ迎へぬ』と歌ふ。ここに起立比古の神は、御樋代み神の御許しを得て燧石を取り出で、野辺に火を放ち給へば、たちまち原野は一面の火の海と化しにける<sup>117</sup>。

朝香比女の神は御歌詠ませ給ふ。『朝夕に主の大神を齋きつつ、すべなき神に願ぎごとするな、邪神を祀りて禍まねくな、朝夕に生言靈を宣りあげて、禊の神事を怠るなゆめ、この島は邪神<sup>まがみ</sup>を祀りて曲津見の禍時じく受け居たるなり。この島の真秀良場選りて主の神の貴の御舎仕へ奉れよ』など教へ給ふ。起立比古の神は『この島に光の公の現れまして、森羅万象は蘇りたり。恐ろしき<sup>なげき</sup>歎の島も今日よりは千代に<sup>あらぎ</sup>歡の島と生れむ』など詠ひ給ふ<sup>118</sup>。

## (7b) 葭原の国土

天<sup>あま</sup>之峯火夫の神、大宇宙の高天原に生れましてより、幾千年の星霜を経たれども、天未だ備はらず、地また稚くして、水母なす漂へる島々の中にも、わけて美はしく地固まりし天恵の島あり。この島を葭<sup>よし</sup>の島と言ひまた葭原<sup>く に</sup>の国土とも言ふ。この島国は葦原<sup>あしはら</sup>の国土に比して約十倍の広<sup>くわうばう</sup>袤<sup>ま</sup>を有し、万里<sup>ま</sup>の海の中に漂ふ生島<sup>いくしま</sup>なり。

この島の中央に屹立せる高山<sup>いぶき</sup>を伊吹の山と称し、その麓をめぐる幾百里の湖水を玉耶湖<sup>たまやこ</sup>と言ふ。この湖水の上流に、水上山<sup>みなかみやま</sup>といふ饅頭形の大丘陵ありて、国津神はこの丘陵を中心に安逸なる生活を送りつつありき。この里の酋長<sup>おや</sup>を国津神の祖と称し、その名を山神彦<sup>やまがみ</sup>と言ひ、妻の名を川神姫<sup>かはかみ たた</sup>と称へられける。

この夫婦が中に、眉目形すぐれて雄々しくやさしき、男女二柱の御子あり、兄をあでやか(艶男)と言ひ、妹をうららか(麗子)と言ひ、互ひに睦み親しみて、影の身体に従ふがごとく、いつれの土地に到るも離れたることなかりける<sup>119</sup>。

---

<sup>116</sup> 以上、第二三章。

<sup>117</sup> 以上、第二四章。

<sup>118</sup> 以上、第二五章。

<sup>119</sup> 以上、第七九卷、第一章。

竜神族の王は麗子を拉致して竜神の都（竜宮島）に連れ帰り、麗子は最早詮なしと、  
人面竜身のあはれなるこの族と嫁ぎし<sup>120</sup>。艶男は麗子が死なずして竜の宮居にいま  
すと聞き、水火土の神に送られて竜宮を訪ねて<sup>121</sup>、竜神王の四柱の侍女神の恋の嵐  
に悩まされ<sup>122</sup>、水上山などの国津神を巻き込む天変地異生じぬ<sup>123</sup>。

山神彦、川神姫は、水上山頂上の神殿に参籠して、天変地妖のをさまらむ事を祈願  
すれども、いかんともせむ術もなく、惨状は益々その度を加ふるのみ。かかるところ  
へ大空の黒雲を分け、四柱の侍神を従へ、嚙喰たる音楽とともに、水上山の頂さして  
降り給ひし神は、御樋代神の朝霧比女の神に坐しましける。侍神は大御照の神、  
朝空男の神、国生男の神、子心比女の神に坐しましける。

朝霧比女の神は、『われこそは主の大神の神言もて御樋代神と降り来つるも。葭原  
の国土は獣に汚されて天と地との怒りを招けり。竜ヶ島の乙女を汚せし罪によりて国  
魂神は怒らしにけり。われは今葭原の国土を治さむと降りて見れば浅ましきさまよ。  
天津神生まれ給ひし食す国をわが物顔に振舞ひし罪なり。山神彦、川神姫が今日の日  
の歎きにあふも神の心よ。この国は汝が治むる国ならず御樋代神の治す国なり。

玉耶湖の中に浮かべる竜ヶ島は今全く備はらぬ国。人の面なしつる女神も身体のそ  
の大方は獣なるぞや。神の子の御魂を持ちて獣なす姫を娶るは罪とこそ知れ。艶男は  
神の律に叛きたる報いによりて亡せにけるかも。一二三四五六七八九十百千万八千万。  
風も早や凧げ雨も降るな雲よ退け地震る止まれ。これの神国は主の神の依さし給へる  
御樋代神の永久に鎮まる清所なり。葭の島根は今日よりは黄金花咲く食す国と宣り直  
しつつ開くべし』などと儼然として宣らせ給ふや、さしも烈しかりし暴風雨は跡形も  
なく尾の上の雲と消え、地震はひたと止まりて、安静の昔にかへりしこそ畏けれ。

山神彦と川神姫と従神達は、重ね来たりし罪科を謝罪せり。ちなみに言ふ、高高山  
を境として、東に御樋代神の貴の御舎は建てられ、土阿の宮殿を造り、改めて土阿の  
国と名付け給ひ、高高山以西を予讚の国と名付け給ひ、葭原の国土を総称して貴の

---

<sup>120</sup> 以上、第三章。

<sup>121</sup> 以上、第六章。

<sup>122</sup> 以上、第六～二一章。

<sup>123</sup> 以上、第二二章。

ふたなしま たた  
二名島と称へ給ひけるぞ畏けれ<sup>124</sup>。

### (7c) 天の鳥舟

山神彦の従神<sup>いはがね</sup>巖ヶ根は、御樋代神の神言畏み、老いたる君山神彦に仕へつつ、予讚<sup>よき</sup>の国をして至治泰平の世となし、老身夫婦の心を慰め、御樋代神の<sup>おんめい</sup>恩命に報いむとして、朝な夕な神を祈り、国津神を愛み、もつて国務に余念なかりける。水上山より以東約十余里は、開拓され、国津神等も心を安んじて耕作の業に従事し居たれども、高光山の山麓まで約三百里あり、この地は御樋代神の御命令に依り、いかにもして開拓せむと日夜焦慮しつつありける。

葭原<sup>よしはら</sup>の国土はその名のごとく地上一面<sup>よしぐさ</sup>葭草に充たされ、その間に花、葉、莖いづれにも強き毒含む水奔草<sup>すみほんさう</sup>なるもの発生し、触るるばかりに毒<sup>あた</sup>に中り、たちまち生命を落とすがゆゑに、広き原野に棲むものなかりけり。ただ、甲羅のある鱐<sup>あま</sup>に似たる怪獣と蛇と蜈蚣を混同したるときイヂチといふ人畜に害を与へる爬虫族の棲み居たり。

巖ヶ根には、春男、夏男、秋男、冬男の四柱の男子<sup>をのこ</sup>あり。巖ヶ根はこの荒地を開拓すべく、まづ第四男の冬男ただ一人をして、国形を視察せむと高光山の頂上に遣はしにける。冬男は全身皮衣に固め邁進し、水奔草の毒<sup>あた</sup>に中りて生命を失ひし水奔鬼<sup>すみほんき</sup>といふ幽霊集団の集落に辿り着きしが<sup>125</sup>、水奔鬼幽霊の笑ひ婆に謀られて、敢へなくも身<sup>み</sup>亡せにける<sup>126</sup>。

遣はしたる冬男は、冬去り秋の初めとなりけれども何の消息もなきままに、巖ヶ根は鳩首謀議を凝らし、第三男の秋男と四人の従者を冬男のとりし道を避け、南方に向ひ高光山の方面に向かはしめき<sup>127</sup>。

秋男の一行は毒草の生ひ茂る野を夜を日に次いで前進し、三日目の黄昏時、やうやく<sup>くわえんざん</sup>火炎山の麓に辿り着きぬ。火炎山は音に名高き大火山にして、人獣<sup>にんじう</sup>を害すること甚し。一行は頂上の火種を一つ拾ひ来てこれの裾野を焼かむと活動しけるが、譏<sup>そし</sup>り婆と

<sup>124</sup> 以上、第二三章。

<sup>125</sup> 以上、第八〇巻、第一章。

<sup>126</sup> 以上、第二章。

<sup>127</sup> 以上、第六章。

笑ひ婆の計略に秋男の一行は譏り婆が造り置きたる火炎山の麓の落とし穴に墜落し果敢なくも現身の生命を失なひける。

とはいへ、その精霊は復活し、五人は首を鳩め、<sup>あつ</sup>婆の奸策にかかりしことを恨み居る<sup>128</sup>。精霊になって後も秋男一行は天の数歌に助けられつつ、活動せり。

五人は、山上よりの岩の雨を潜り、辛じて頂上に達しければ、猛獸毒蛇は目を怒らせ牙をとぎ、咆哮怒号しながら、五人に向かつて噛みつき来たる。五人の勇者は火種を取らねば置くべきかと、<sup>まつしぐら</sup>鷲地に燃ゆる火の傍に近寄りたるを、猛獸毒蛇の群は生命限りに襲ひ来たり五人の勇者を口にくはへて火口に投げける。かくしてあはれ五人の勇者は、猛烈なる火に焼かれ、白骨となりて火焰の息に翻弄され、高く天に舞ひ上り再び地上に落ち来たりけり<sup>129</sup>。そのやや半時ばかり経て、火炎山は大鳴動を始め、つひには大爆発して高き山影は跡形もなく大湖水と変化し、猛獸や水奔鬼の大部分は全滅の厄に遇ひて、その中央に小さき小島を残すのみとはなりぬ。この小島に救はれたる精霊は、秋男一行をはじめ、朝霧、夕霧、秋風、野分、秋雨および僅少なる水奔鬼および猛獸などの小部分なりけり。

さて高光山に天降りませる朝霧比女の神ほか四従神は、遙か西方にあたり大爆音聞こえ、火炎山の跡形もなく消え失せ、ただ黒雲の漲ぎれるを望見し、<sup>ことはか</sup>事議り給たまひ、<sup>あさそらを</sup>朝空男、<sup>くにうみを</sup>国生男の二柱は<sup>おほかひ</sup>大峡小峡の木を伐り、天の鳥船を七日七夜の日数を重ねてやうやくに造り上げ、両神はこの鳥船に乗りて中空に翼をうちながら、<sup>くにはら</sup>予讃の国原さして進ませ給ふ。

両神は、予讃の国土の空を静かに下らせ給へば、笑ひ婆の棲み居たりし忍ヶ丘の平地に<sup>みふね</sup>鳥船はやすやす着きにける。火炎山一帯約百余里の地は大湖水と化したれども、忍ヶ丘は幸ひその圏外に置かれて、約一里近くまで湖水は展開し居たりける。二神は天地の神霊に向かつて、感謝の言霊を奏上し数歌をうたはせ給ふ。かく歌うたふ折しも、笑ひ婆に生命を奪はれし精霊なる国津神の<sup>ぼつし</sup>末子冬男は、熊公、虎公、および山、川、海の三女の精霊もともに、恐る恐る出で来たり、微かの声にて両神に向かひ感謝の真心を歌ふ。天津神二神は、精霊達に『心安かれ永久に守らむ』と歌ひ、その夜は

---

<sup>128</sup> 以上、第一一章。

<sup>129</sup> 以上、第一五章。

忍ヶ丘の冬男が館に息を休めける<sup>130</sup>。なほ、忍ヶ丘の麓には数万の猛獣や水奔鬼など、逃場を失ひ、右往左往にひしめきあへりけり<sup>131</sup>。

水上山の神館<sup>かむやかた</sup>の巖ヶ根は、冬男、秋男一行の何の消息もなきままに、三度御子を派して調査せしめむと事議る折しもあれ、東南の方にあたつて、火炎山は轟然として爆発その物音に水上山の館まで地鳴り震動はなほだしく、人心競々<sup>きやうきやう</sup>たりける。春男、夏男は数多引き連つれ、第三回目の調査に向かふべく決定したり<sup>132</sup>。

火の湖の中央に浮かびたる小さき小島を秋男島といふ。火炎山崩壊に大略滅亡したれども、さすがに執着深き笑ひ婆、譏り婆<sup>おこり</sup>、瘡婆<sup>なき</sup>、泣婆などは辛うじてこの島に取付きけるが、白骨<sup>はくこつ</sup>となりし秋男の霊と他の救はれし者どもは悩みつつも忍びゐたりき。かかる処へ天の鳥船御空を高く轟かせながら、秋男島の平坦なる砂地に悠々と舞ひ降り。中より現はれしは御樋代神に仕へたる朝空男の神、国生男の神を始めとし、精霊界に入れる秋男が弟冬男の一行、および弟の所在を探ねし春男、夏男一行にてありける。秋男はこれを見るより歡天喜地<sup>くわんでんきち</sup>、たちまち四人の従者を引連れ降り来たり。ここに二柱神は、声も清しく天の数歌を奏上し給ふや、四婆などは、熱湯の湖水に陥り全滅せり<sup>133</sup>。

葭原の国土を東西に画したる中央山脈の最高峯高光山の聖場には、つねに紫の瑞雲棚引き、四方の国形を瞰下し得る最勝最妙の霊地なり。この地点を青木ヶ原と称し、八百万の神等ここに集りて<sup>あつま</sup>政<sup>まつりごと</sup>に仕ふ。朝霧比女の神と子心比女の神の逍遙の折、二柱の乗れる鳥船は青木原の広場に凱旋し給ふ<sup>134</sup>。

他方、朝香比女の神の一行は、歎かひの島を歡ぎの島と改め、万里<sup>まで</sup>の海原にて<sup>くわうぼう</sup>広袤第一と聞こえたる葭原の国土の東海岸なる松浦<sup>まつうら</sup>の港に、真昼頃漸く着かせ給ひ、その松浦の港の真砂の上には、朝霧比女神の神言の遣はせし鳥船は静かに降り来たり、さらに八重の雲路を分けながら、その日の夕<sup>ゆうべ</sup>ごろ、大御照<sup>おほみてらし</sup>の神の操れる鳥船は、青

<sup>130</sup> 以上、第一六章。

<sup>131</sup> 以上、第一七章。

<sup>132</sup> 以上、第一八章。

<sup>133</sup> 以上、第二〇章。

<sup>134</sup> 以上、第二一章。

木ヶ原の聖場に、安く着きにけり<sup>135</sup>。

高光山の聖場は、御樋代神朝香比女の神の降臨にはかに輝き漲り<sup>みなぎ</sup>、新生の気四辺に漂ふ。朝霧比女の神は心の限り歓待を尽くしぬ。朝香比女の神は御歌詠ませ給たまふ。『朝霧比女の厚き心のもてなしに、感謝<sup>みやび</sup>の言葉吾なかりける。葭原の国土の宝とまゐらせむ、火種を保つこの燧石を。この宝一つありせば葭原の、国土清まりて永久に開けむ』などと。

朝霧比女の神は雀踊りしながら満面に笑みを湛へ御歌詠ませ給ふ。『ありがたし国土の宝と燧石、吾に賜ふか朝香比女の神。火炎山火種を得むと村肝の、心を長く砕き来にけり。鬼大蛇火炎の火口を守りつつ、国に火種を取らせざりけり。火炎山陥没なして湖となり、火種の失せし淋しき国なりき』などと。

ここに朝霧比女の神は、燧石を恵まれたる嬉しさに、大御照の神に命じ、諸々の神等を従がへ、天の鳥船に搭乘させ、燧石をもちて地上に降らしめ、火を放たしめ給ひければ、火は四方八方に燃え拡がり、猛獣毒蛇、水奔草、葭草などの原野<sup>はらの</sup>はたちまち火の海となり、その壮観たとふるにものなかりけり。

朝霧比女の神は、朝香比女の神の好意に報いむとして、鳥船造りに功ある国生男の神を御供に仕ふべく遣はし給ひたるなり。これより一行六神、駒諸共御舟に浮かびて、西方の国土さして出で給ひける<sup>136</sup>。

### 十三 伊佐子の島<sup>137</sup>

高照山の西南にあたる万里<sup>まで</sup>の海上に、相当の面積を有する島国あり。これを伊佐子の島といふ。この島の中央に大山脈東西に横たはり、これを大栄山脈<sup>おほさか</sup>といふ。大栄山脈以南をイドムの国といひ、以北をサールの国といふ。この島は万里ヶ海の島々の中にも、もつとも古く成出でし島にして、国津神等は数多棲息し、イドム、

---

<sup>135</sup> 以上、第二二章。

<sup>136</sup> 以上、第二三章。

<sup>137</sup> 他の(1)～(7)が紫微天界最奥霊国の物語に対して、本節のみ、天祥地瑞神系表から外れており、天祥地瑞神系表には含まれない。時代としては、琴平別神の出現からみて、霊界物語に属している。天祥地瑞第八一巻では、高照山の西南にあたる万里の海上の島国とされている。



サールの両国は互ひにその領域を占領せむと、数十年にわたつて戦争止む時なく、  
数多の国津神等は塗炭の苦を嘗め、救世神の降臨を待つこと<sup>あたか</sup>恰も大旱の<sup>うんげい</sup>雲霓を待つ  
の感ありける<sup>138</sup>。

以 上

---

<sup>138</sup> 第八一巻，第一章の第一段落のみに対応している。本巻は、『天祥地瑞』の最終巻を飾るもので、総説は「天地開闢の極元」であるが、本文は天祥地瑞神系から外れている。